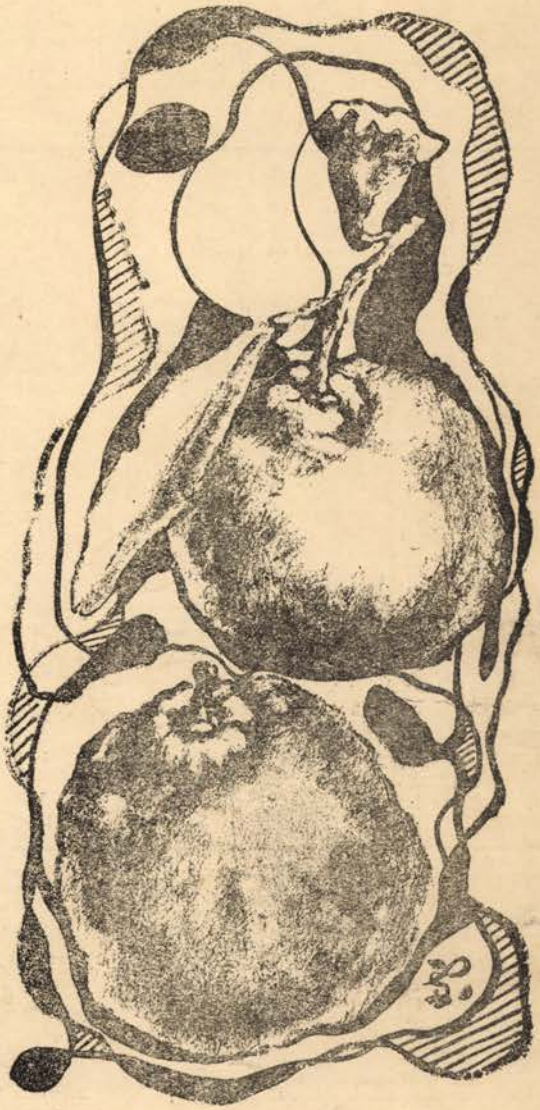
川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi



昭和廿三年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿六年五月一日發行第六卷第五號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百八十八号

No. 288
五月号

五月号目次

題字……麻生路郎
表紙……福富雷童

川柳原理(3)……福田山雨楼…(三)
机の塵……安川久留美…(五)
窓口…(1)…麻生路郎…(一〇)
句評・川柳街……茂乃・若葉・白香・良子・茶々・梨里
不朽洞賞受賞者の横顔…種瓜平…(二)
窓口…(2)…麻生路郎…(一七)
小説・將軍娘(五)……山路閑古…(一八)
臭書に残る話題……尼綠之助…(一四)
詠史川柳「にっぽん」(8)戸田古方…(九)
「光」か「川雑」か……麻生路郎…(一六)
作句と選者の苦労……山本葉光…(一五)
我達のグループ……南捨舟…(一七)
不朽洞喫煙室……(二〇)
鮎美・山布・豆秋・一杉・妄夢・栞・瓜平

★

近作柳壇……麻生路郎選…(二二)
川柳塔……麻生路郎選…(二六)
同舟近詠……諸家…(二一)
一路筆「PTA」……村松夢裡選
木下幽王選…(二五)
各地柳壇……(二〇)
動……(一六)
不朽洞会から……(二二)
川柳不朽洞会名鑑……(二六)
編輯室にて……(二六)

不朽洞賞受賞者の横顔

ピンボケの雄姿

新川博也氏

(二月句会優勝者)

「ヒロヤさん、御職業は？　烏ケ辻、川柳大阪なんかの句報はうまいもんですな。」

「謄写版の方はサービス的アルバイトですよ。本職は市電の交助会で、絲雨さんのところで働いているんです。」

「それが川柳との接点ですか？」

「イヤ、学校時代の会誌の句をみて、川柳つてえゝもんやなあ、と感心して三三度他の会へ出るうち、松坂屋クラブの廣告を見て、ふらふらと出席して以来、すつと麻生師の指導をうけています。」

「終戦直後の句で〝網棚にアララ

醤油が洩れてをり〟というのを見て、うまいなあ！と思いましたよ。」

「あれは先輩にもほめて頂いたが、僕としては大して好きではありません。僕は写生句より、抱負などつぶされていく街の音といつたような主観的な句が好きです。」作句は昭和十六年頃からはじめました。

「こりゃ、随分ボヤケた写眞ですな。」

「残念ながらピンボケなんですが記念のために、不朽洞カップを抱いている一世一代の英姿です。」

なみ〳〵とつぐ

荒木哲水氏

(三月句会優勝者)

阪神電鉄に務め、駅の助役もやつたことがあるので荒木鉄水と号したが、後ち、哲水と改号。川雑梅田支部で同じ職場の先輩鮎美さんから川柳の手ほどきをうけた。

通路さん梅の蕾を教えている。句にも鮎美さんの移り香が漂つている。川柳に手をそめたのは昭和十六年頃。

生れは城崎に近い香住という農村で本場の但馬牛の話になると鼻息が荒い。じや、スキ焼き通だろうと聞くと、村では育てても喰わない。神鍋山の裏だからスキーは

下駄ほどに馴れているという。

日下療養中とのこと。

ワイフにシャツターをきらせたという写眞を見せる。折角カップを獲得しても飲む眞似ではつまらないだろうと聞くと「飲みましたよなみなみとついで家内と二人で」「へえ！奥さんも」「味噌汁をネ」

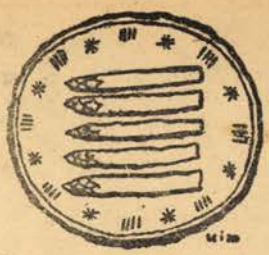
絵と文　種瓜平

今年もお家族づれで
5月20日まで
淡輪
つゝじ人形
見流し14場面
日曜・祭日ごとにアトラクションあり
入場料　大人 50円　小人 30円　団体割引 30人以上2割引
主催　大阪日日新聞社　南海電車
入場券つき割引乗車券…南海各主要駅で発売
急行臨時停車
ビックリハウス・乗馬塔・豆汽車・ジープ等で一日中楽しく遊ぶ
淡輪遊園
南海電車

本社五月句会

日時・五月五日(土)午後六時
会場・大宝文化会館
大阪市南区三休橋南詰東入
兼題・「白墨」「修繕」「蛙」各三句
席題・柳話・句評等
会費・五〇円

川柳雑誌社



川柳原理 (3)

福田山雨楼

二、川柳の條件

1 基本形態

川柳の表現形態は十七音にある。このことは連歌俳諧、前句附から独立した当時からの裸像であつて、明治に再興し現代にその成長を遂げつつある川柳文学の歩みの中に、厳然として確立された所謂定型なのである。この五、七、五、十七音律の成熟した詩形に対する日本詩学の基礎理論は、従來幾多の学説もあり十分な研究材料の上に打樹てられているが、要するに日本語と日本人の呼吸に合致し、日本人の息使いを最も有効に発揮できる最短の音律だと云うにある。あくまで簡潔を好む日本人の國民性に適合し、自然であり效果的であることは最早異議をさしはさむ余地がないのである。

これに対し反旗を翻し自由律を標榜する向もあるが、多くは独り角力に終り遂に自ら興味と愛着を失つて自滅する始末である。俳句では先覚者碧梧桐、井泉水、一碧楼等が逸早くこれを唱導実践しつゞけて來たものであるが、両碧共に亡く残つた井泉水が営々三十七年間一貫して「層雲」を刊行し、四百数十卷を重ねているが孤城落日の感が深く、その作品も奇妙な姿貌を呈してジャーナリズムの失笑を買つている有様で、十七音律に反逆する俳人の末路は哀れと云うもおろかである。

十七音の傳統を重んずる精神は川柳を信奉する態度であり、十七音を縱横に驅使する技は川柳を生かす道である。十七音から離れる恣意は川柳を放棄する前提であり、十七音を認容せぬもろもろは川柳に縁なき衆生である。

十七音は五、七、五の三シラブルから成立すべきもので、これが定型の根源の如く云われているが、必須の條件ではない。七、五、五でもよければ八、四、五でもよく五、五、七でも構わない。要は十七音構成になればよいのである。これら不均整定型とも云われるものはやたらに推奨すべき音脚ではないが、その句の内容に即した表現ならば却つて新鮮味を齎す効果のあることを忘れてはならないと思う。

破調及び字余りは時に許容される除外例である。十六音或は十八、十九、二十音位のところまでは、句の内容が生かされていれば差したる耳障りにならぬのみか魅力を添える場合すらあるのである。歓迎すべきことではないが潔癖に禁止すべきではない。

川柳には言葉の制約がない。俗語でも会話体でも独白調でも構わない。非常に碎けていて單なる言葉の切れつぱしでもよい場合がある。内容に即し思想を生かし表現上効果的なレトリックなら殆んど文句なしに言葉の駆使を認容する。それほど表現態様が自由奔放であり縱横無碍である。そして連用形、連用止の使用が常套化されているが、これは川柳をして一層卑俗感を呈する素因ともなり、またおかしみの語感が強められる場合もある。

武玉川にその多くを示している十四音は定型に比して更に短少な簡約的形態であるが、川柳は更にそこまで圧縮できるものかどうか問題である。武玉川は柳樽の先蹤をなしたもので文学史的には貴重な遺産であるが、これは短歌形態の後半を故意に分割し、引離して集句したもので独立した表現状態と見ることには若干の疑問があるのである。たまたまその内容が川柳の意図するところと近似しているので、川柳に準じて鑑賞され重視されて來たが、これはあくまで例外中の例外として取扱うべきものと思う。

2 三要素について

川柳の三要素としてユーモア、穿ち、諷刺（稍々古い文献には滑稽、穿ち、輕みとある）があげられていることは既に常識となつているが、これには大した学問的根拠はないようである。即ち多くの古川柳から抽象し、帰納し、要約して、川柳にはこの三つの要素が最も濃厚であることを傳承したものに過ぎない。だからこの三要素が絶対の規矩でもなければ枠でも型でもない。

けれども三要素は軽視し或は放棄してもよいと云うわけではなく、川柳作家として充分の関心と留意とを要するものであることは否定できない。句にこの三要素の何れかが見事に盛られ立派に開花した場合は、川柳作品として尊重さるべきであり、川柳の藝術性を雄弁に主張し得る実体を示すものである。三要素に縛られたり制限される必要はないが、三要素のよさ、素晴らしさ、見事さは謙虚に受入れ且つ発揚すべきである。この中ユーモア、滑稽については前節においておかしみの本義と共に説述したのでこれを略し、穿ち、諷刺について考察を進めて見たい。先ず穿ちであるが、或る論者は川柳とは要するに穿ちであると断言した位で、これが川柳の本質に作用する根源的なものの一つであることは容易に肯かれるところである。穿ちとは事物の眞実に触れ、眞相を抉り、核心を貫いた見方、考え方、のべ方を指す言葉であるが、川柳がおかしみの世界にアンテナを張つて、その中から情なり姿なりの眞実をつかみ取ろうとする以上、この穿ちの態度、穿ちの働きは最も川柳文学にふさわしいものである。

穿ちはそれが洗練されたものであり正鵠をつかんだものであればあるほど人の意表に出、感覚を刺戟し、興味と驚

異を呼び起すものである。川柳は意識的或は反射的にこの穿ちの作用に向つて求心力が働く。川柳が非凡を要求し、ズバ抜けた、出色の作品を尊ぶのも這般の心理に胚胎するのである。

穿ちはまた何等かの意味において新発見である。その限りにおいて穿ちの川柳は求心的、学究的、叡智的なひらめきを見せ、同時に社会性、融和性が附随するのである。

次に諷刺であるが、これはある時は川柳の代名詞のように云われたこともあり、川柳の最も大きな分野を占める要素であると云つても過言ではない。しかし古川柳にはこの諷刺が比較的僅少であり低調であつた。このことは当時の言論抑制の歴史と思考力、判断力、観察力が缺如していた未開的事実に原因するものだが、一般の知性、感性、理性が向上し殊に新憲法下の今日、諷刺は必然的にわが川柳文学の重要な要素となり主体的な役目を担うものである。

川柳の先覚者井上剣花坊は革新川柳の大旆を掲げて六十余年の生涯を川柳に捧げたのであるが、その衣鉢をついだ新鋭川柳家の一群は川柳を諷刺文学の先駆的な存在として勇敢に行動し、戦時中反戦思想を盛り込んだ句を発表したため鶴彬は捕えられて獄死(或は刑余間もなく病死?)した一挿話も残つている。またフランスでは諷刺文学の力で内閣が更迭した例もある。このように諷刺は大きな力を以て社会を覚醒し、風潮を浄化し、世論を昂揚するものであるから、川柳の活動方向として最も妥当であり適格であり優性であることを理解すべきである。

要之、ユーモア、穿ち、諷刺は川柳本質の大宗として、よくおかしみの詩情に直結するものであり、川柳の特色を鮮明に発揮する代表選手であるから、あくまでこれを培養し発揚してゆくべきである。勿論この外の新しい視野に立つて新時代感覚に鋭敏であることも必要であるが、三要素は古いと云う単なる観念で無批判に之をしりぞけることは慎まなければならない。

それから軽みについて一言する必要がある。それは古い三要素には諷刺の代りにこの軽みがあげられており、古川柳の中にも優れた軽味の句が多いことは否定できないのであつて、軽味を顕著な特色の一に数えたことはよく肯かれるのである。ところが一方俳諧においてもこの軽みの問題は、芭蕉俳論及び作句態度の重要な境地を画したのであつて、むしろ軽みは俳諧の方にその本筋があるとも云えるのである。何故軽みが俳諧の重要な命題となつたかと云うと、芭蕉が奥の細道の行脚から帰つた後不易流行の原理を提唱し、さびから更に展開して軽みの理念を説き、芭蕉の到達した最も深い俳諧の境地を示したからである。その境地は「高く心を悟りて俗に帰るべし」と云うにあるが、この言葉の意を更に要約すると軽みに帰するのである。軽みの境地は俳諧本来の特質である通俗性を捉えたものであり、これによつて俗中に俗を去りつつ日に新たに生きたのである。勿論軽みと云う言葉は重厚に対する軽妙と云う風にも取れるが、芭蕉の云う処の軽味は俳諧本来の宿命である飄逸、滑稽にその根源を発しているのである。

ところが川柳における軽みは、古川柳に軽妙な句が多かつたことから重視されていたのであるが、近代に至つてはむしろ軽視に傾き思想、思索の背景ある句が重んぜられる結果、最早今日的意義の深いものとは云えなくなつた。ただ平明なる写生を主とする作家群においては今も尚軽味の句をよろこび、風趣捨て難きものがあることは周知の通りである。そして俳句の方では一方の難解句や重い句の流行を制するかの如く、軽味の句がホトトギス等に散見され虚子以下花鳥諷詠派の大きな関心を呼んでいるところである。この柳俳における二つの対立した傾向から、俳句の超時代的な風雅観の絶ち難き命数がうかがわれ、川柳には時代に呼應するリアル追求の血脈が流れているのを汲取ることができる。

3 川柳の藝術性

よく「句がものを言う」と云われるが川柳の眞價はこの一言に盡きるのである。川柳は共感を求める詩であるから読者が何等の感興をも起さぬとしたら、その句は死物であり廢物である。尤も読者の受容態勢が幼稚であり無智であつて詩を理解するだけの鑑賞力を持たぬ場合は論外であるが、さもない限り読者を感動せしめ得ぬ作品は落第である。反対に名句の生命は永く且つ強い。笑いが止らぬ場合もあれば涙が出て仕方のない時もある。また強い反省を促したり義憤的に蹶起せしむる場合もある。これがみな僅々十七音の魔術であるから不思議と云うの外はない。

この不思議の力は一体どこから生れてくるのであろうか。どう云う作用によるものであろうか。藝術の原理は科学の原理と違つて必ずしも合理的ではない。知的に発見されるとは限らない。そこにむつかしさがあり神秘さもある。素質とか天才、そして鍛練と苦闘とが要求される所以である。全人間的な肉体と精神から割出される不思議な十七音の魔術、それを少しでも闡明し解剖し追求することは本論の使命でもあり意図でもある。

先ず平凡なところから考察を進めて見よう。それは推敲と厳選である。芭蕉は舌頭千轉と云うことを説いたそうであるが、一句ができ上る前に推敲を重ね盡し、筆にしてからも亦見直し投句までにまた再誦して、もうこれならと云

う自信がついてから投句する。これを受取つた選者はそれらの句を幾度も幾度も読み直し、再三再四篩にかける。発表までには尙全体の粒を調べて見劣りのする句は遠慮なく朱線を引く。かくして作家、選者共に苦心惨たんして発表の段取りになるのである。古く柳樽の例を見てもその嚴選率は想像に余るものがあつた。現在の句会の選句や雜誌発表の段階を見ても多くの場合斯る嚴選を行つているのである。光を出すために玉を磨くようなものである。

次は作句の根源に遡つて取材着想の苦心である。川柳作家の眼と心はいつでも明鏡のように澄んでいなくてはならない。そしてこれはと思つた影像は、或は心象はましらの如く機敏に捉えて心深くメモするのである。正確に焦点的にデッサンを描くのである。これは作家の四六時中の生活（勿論心の働きも加えて）から滲み出、ひらめき出るものであつて決してぼんやりと見過していないのである。神経質的なあせりや漁色的な渉猟ではなく、自らの心を養い眼を澄ませつつ聞きとる底の慎重で熱意のある態度を常に心懸けるのである。

その次は句会、小集、句評、鑑賞、研究等の営みである。直接先覚者について教えを乞い不審を直す場合もある。火花を散らすような論争をする事もある。〆切時間を氣にしながら作句を競うスリルもある。兎に角お互いが無意識に練磨し切り結びつつ向上を図るのである。

その他読書、執筆、反駁、文献、例証、養成等心ある川柳作家の積極的な活動範囲は少くないが、要するに立派な句を作り生命のこもつた句を生む努力に外ならない。その点ある程度まで藝道の修練と異ならない。ただ最後の一線で分岐するところは、川柳の方は独創を尊ぶと云う点が違うのである。百人百色、顔の異るが如くその生み成せる句の息吹も亦百人百色でなくてはならぬ。川柳の藝術性の確立は実にこの一歩から始まるのである。

川柳の藝術性は斯くして読者をしておかしみの詩の世界に浸らしめ、廣く共感を呼んで心を愉しませ、現実を（或は理想を）再確認せしめるであろう。十七音を嚴守し、三要素及びこれに準ずる川柳本質の核心をつかみ、いやが上にも独自の藝術美を盛ろうとする川柳の魔術を讃えると共に、更に一段の情熱と叡知を傾けてその扉を開かねばならない。（未完）

机の塵

——本誌前月号から——

安川久留美

酒くさい息で机の塵を吹き　瓜平

花が咲いて陽春ともなれば誰も机のちりを吹く位の想はわいてくる。私もかつて「拜啓とかいて机のちりを吹く」と詠んだ。然し夫れは月並調、瓜平氏のは、上五宿醉？とにかく酒の香の自認する息でフッと埃を吹いた所にその人物も偲ばれて妙味があらう。一級か二級かこの酒は机のちりには光栄の匂ひとなつた。

もう一本立春大吉酌けさせる　芦穂

これも酒の句だ。自由律ながら表現は軽い。孫の守りをするという作者が、一本では一寸物足らず、氣兼ぬもあつたが、「けうは節分のあくる日立春大吉」がピンと泛んだ刹那の功智に次の一本をつけさせた考巧さを味うてほしい。「酒」の文字を用いずに「酒」をうなづかしめる点もいゝと思つた。佳作。

トラックにふら〜とする家に住み　迷宮

地震じやない、トラックの響きに貧乏ゆるぎする長屋か。バラックに近い建物がフラ〜とする丈けで句に成つた。「庭よ離亭よ、別荘よ」と豪奢ぶりの成金輩には到底こんな川柳の妙味は解せまい、といつて畢竟川柳は貧乏人のみの天下でなし、納屋のやうな家に住んでも幸運はめぐまれ、抱え自働車を置く境遇になるかも知れない。とに角該句は軽味あつてよし、深刻でないが何かを想わせる。

墮胎する前に札束數へられ　芳仙

産兒制限で墮胎や避にんが八釜しい世相の中から斯うした縮図は有りがちのこと、この「前」は即ちゼンでなく墮胎する人物の前に数へる札束でいつかはキッスした唇のツバをつけての札ビラに皺のないのが何千円か、この際「束」という字がちと大袈裟のやうだが、之れ位の誇張は仕方なからう。

右四句は四月号本誌「川柳塔」から私の眼にうつつた佳吟として頂戴した。

麻生路郎著　水武書房版

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

（B6版　二一二頁）　定價一〇〇円　送費　金十二円

取次御注文は　大阪市吉住局區内芳代西五丁目二五　横錦口巡大阪七五〇五〇　川柳雜誌社

川柳塔

大阪市　浪　玲之介

詩も恋もなく啄木の病氣する
氣の弱りだろうか妻の有難味

奈良縣　上田　翠光

ニコリともせず性慾を説く歳か
恥しさよりも恋しさあらわなり
一途さは時に辟易する恋さ

横浜市　福田山雨楼

餅の黴わが色彩に似てさびし
遠吼えの如くひびかん深夜の咳
諦観も立命もあり老妻ごろね
他所の娘のたちを見拔くも年の效

悼仁科芳雄博士

戰時中僕は親爺と思つてた

悼宮本百合子

日本のパールバックを期したのに
大雪などと北國人に嗤われじ

池田市　戸田古方

にぎにぎなど思いもよらぬがしんたれ
大医典かんじんのことかいてなし
紹介狀のための名刺も用意して
二へん目に出したお茶まで冷えかゝり
寢返りを打つて背中を掻けと云ふ
捨てられて先の男のよさを知り

布畦　内藤草一郎

臥薪十年後添へとして浮き上り
襟垢をやもめ暮らしといたわられ

尼崎市　水谷鮎美

さかねぢはウキスキーに醉ひ酎に醉ふ
燒酎を毎晩愛すとはさびし

東京都　宮田不二

お馴染さんと云はれ嬉しい繩のれん
彼女のお母さんを訊けば私と同じ齢
季節とは爭えぬもの足袋を脫ぐ

大阪市　福田妄夢

妻のやけくそ笠置シズ子の眞似をする
造花屋へ春まつさきにやつてくる

岡山縣　浜田久米雄

わが虫を殺して役員会がすみ
もう春が造花の下にしのび寄る

大阪府　西尾栞

たまさかに妻を連れれば雨に遭ひ
三三桂とはねて統制解除待ち
相場拳三ツ指ついた妓と見えず
女とは強く出ないと氣に入らず

大牟田　高田抱逸

姦通がばれても裏町いゝところ
三染を早退さして灰田來る
校長が死んで大酒が知れわたり
葬送に惜しい雲雀が鳴いてくれ
まだ濠に住んで他人は振向かず

米子市　三鴨美笑

平和なる町とはなにかものたらず

佐賀縣　松野えいを

足を組む稅吏へ三度御辭儀して
停年へ机の埃拂つとき
PXのガム吐き出して唇を向け
ショール変え女は春の色へ解け

太宰府觀梅

梅へ來て梅と人とを避けて飲み

大阪市　市場沒食子

雪解けの雫をよけて紙芝居
べた惚れのくせにお金は出し渋り
浪人をしても麻雀ばかり凝り

名古屋市　吉田水車

裏返へしと言へばフンと笑ったり
たまさかの士産を妻は怪しがり
無茶苦茶に金を費うた夢を見た
割勘を残し轉勤してしまい

大阪市　須崎豆秋

均一の中にさみしき荷風集
無一文といふスリルを君知るや
葱買うて寒い交叉点で立ち
ラブシーンを見ている消防監視台

兵庫縣　北川春巣

袴はいてちつとも醉えぬ今日の酒
湯豆腐も馬鹿にはならぬ子沢山
ほ見といてくれと女は化粧する

奈良縣　尾崎方正

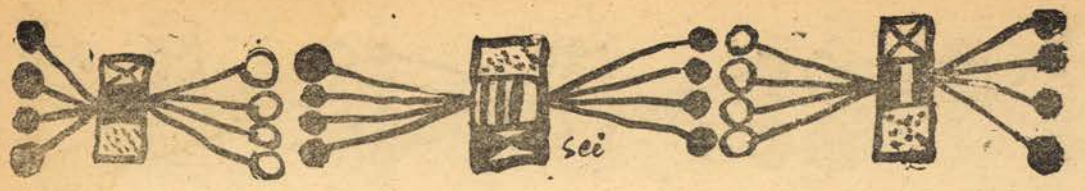
垢浸みた皮手袋に春が來た
ほろ醉へ彼女が居ればなほよろし
パーマ乱れて不動さんの火の如し

下関市　楼川不水

これはしたり女房の年を忘れてた
大作はひげぼう〳〵の裡に出來
宴酣好きな妓は向ふ側

岡山縣　鈴木九坡

迂濶にも女給舌打ちしてしまい
その柄にするさと夫うるさがり



督促狀ちと不氣味なる叮重さ　大阪市　水谷竹莊

相傘で帰るつもりがもう晴れる
何やかと話がとがる倦怠期
言い過ぎた無心へ男よりつかず　兵庫縣　小沢史葉

新築の席に税吏も招待し
青雲を志ざしたが一課員　大阪市　士井文蝶

挨拶は抜きにしまして飲むはなし
判らず屋ですが良い腕持つてます
どつちみち足らぬ同士の資本論　岡山縣　山分淑郎

地位と金捨てた幸福温かし
窓の陽を追ふてむつまじ老夫婦　大阪市　大西野介

梯子酒わが淋しさの果てしなし
子のやうな男と議論たたかわし
理性理性さけをのむならさけにのまれよ
老嬢の額に知性凍り居る
掌にうけて花瓣の纖細な　経営労務者（四句）

ポカンとして廻轉椅子に居る
税務署を交じへぬ酒のうまいこと
妥協して帰り烈しく妻しかる
手形手形外では春が馳足だ　高岡市　山根白星

パトロール自分も飲める叱りよう
酔いたがる心理を女將だけが知り
甘い世と思うキャメルに火をつける　大阪市　冨岡淡舟

閑人と見たか役員持つて來た
驚を聽く單純な暮し也
勉強の子に邪魔なもの観世流　奈良縣　飯降白香

入試前疎遠の人がベンチヤラし
合格へ母の重荷はやつとおり　山口縣　長野井蛙

共学の男と仲良く落第し
アイスの鞄が悪魔のような口をあけ
手土産は取つたが借金断られ
同情はするがと巡査聞き入れず　大阪市　竹田芦穂

老らくの恋もよからうセル時分
待たされてスカイサインを寒く読む　大阪市　上田春柳

子がまねる鋸の目の恐ろしき
春よこいこい着ぶくれの子がころび　大阪府　友淵貴山

居候どこで飲んだか膳をさげ
一滴の酒に友情溢れいづ
腕利きと言はれ飲む方如才なし　布施市　森下愛論

見合馴れして女歳をとり
おどけた返事子供があればこそ　大阪市　松江梅里

担架まで出して八百長念が入り
五年経つてもまだ引揚者戰災者　岡山縣　直原七面山

貞操を兎や角言うて馬鹿にされ
未亡人乙女らしさを冷かされ
泣ける丈泣けと無情なお父さん
純情な恋友人に手を焼かせ
明けすけに好きと言われてあわてたり
私にも十九の春があつたつけ
泥田はうあれが私のお母さん　宇部市　上林粗影

春なれやチンドン屋になりたいと想ひ
勉強の世の中貞操料もまけてくれ
白粉の可否を論ずる暮し向き　兵庫縣　石岡正司

鉄骨のビル又銀行が建つと云ふ
猫柳娼婦も春の色となり
女丈夫で遂に夫を家出させ
西陽うけ屋敷をゆづる判を捺し
指定席今日は税吏を連れてゆき　正月三日父逝く

弔客に交り主侍医の顔もみえ　鳥取市　河村日滿子

女房に値札の付いたまゝ渡し
寢てる兒を起した罰の子守なり
姉さんのあとへ人権無視されて
金策へ世帶の裏も言う　兵庫縣　家沢莽花

初雪に年酒の残り見つけ出し
ねんねこをワイフに着せるてれくさゝ
愛人の無邪氣が少したよりなく
内の子に似てる白衣へ話しかけ　滋賀縣　黄瀬美秋

ことなかれ主義でも結構ある悩み
恋知つて席次を五十ほど下り
借物と見られてしもた裾模様　岡山市　藤本滿年

へそくりが眉間の皺をのしてやり
エプロンの袖をまくつた風呂加減
宴会へ重労働の氣で出かけ

一日を馬鹿見たように暮したし
熊本縣　西口如川

選挙好きらしい皮算用に暮れ
三対三観覽席の搖れ止まず
よんどころなく高利を恩に被てしまい
岡山縣　福島鉄兒

女湯ののれんに風のあるを知り
某氏の結婚へ

夕刊を読むに寄り添う妻の居て
死を讃美してる詩集を持ち続け
岡山市　藤本茶々

涙もろく貸してあほやと笑われる
寺詣り老母髪を撫で顏をなで
大阪市　塩浜一路

正直が一人まじつてもめて居り
腹痛が起りラブシーン迄居れず
善人のグループ小さな決議して
京都市　谷内一草

スリだとは知らず礼までいつといた
母と子が一つに溶けて乳房吸う
入学式親が返事をしてしまい
入学へ犬後になり先になり
池田市　太田木声

もう勝負つきましたなと去に仕度
招待券其の日になつて他人にやり
大阪市　伊藤迷宮

水臭がつていても取るものだけは取り
大阪弁の車掌にあつた人間味
悔いのない人に唇盗まれる
岡山縣　高山朗笑

助太刀はしたいが身にはかえられず

旧友と語れば時間矢の如く
岡山縣　服部十九平

高過ぎる勘定書きで涙をかみ
眼を洗ふだけに半日待たされる
妬くことも退儀になつた倦怠期
二階から屋根に出てみる日曜日
西宮市　田辺由布

酎に醉いドンキホーテと馬が合い
スケますと仲居の方がよくいける
自轉車も女も時間貸しで足り
誘蛾燈ではござんせぬキャバレの灯
大分縣　桑原表情

印度から暑い君ケ代きれぎれに
温泉地獄の一札心中おことわり
熊本縣　成瀬月仙

大サジは口を開けよといふ如し
黒ソフトズンドコ調で歩いて來
交叉点牛へ一鞭当てるとこ
芦屋市　若林草右

アベックが抱合う程にバスが搖れ
マニキュアのチョツピリ剝げて風邪が癒え
大阪市　足立春雄

金魚鉢に替えてもやはり鮒であり
マスコットくれた女が先に死に
大牟田　中村五醉

消しゴムで消へそうな髯たくわえる
ストリップショウを巡査も覗いてみ
水つばなすゝつて貧乏は嫌だ
犬だけを残して一家心中する
熊本縣　有働芳仙

花見バス帰りは炭坑節も乗せ

看護婦に魅せられ講義聞き洩らし
失恋の医者の手術が少し荒れ
子がなくて白い物ばかり干してゐる
愛媛縣　大西迷窓

風船のように生きたし或る日ふと
重役の頭をたゝいた夢も見る
岡山市　延永忠美

愛情を何処かへ置いて來た女
わめきたい様な孤独の酒浸り
大阪市　米田孤舟

胃袋のもどしもせずに夏みかん
絵を見れば理想の夢の顏長し
情熱の天主をめぐる濠二重
大阪府　阿形一杉

婚約なりし友に
床柱拭いて嬉しい日が近く
境内の鳩が驚ろく人出なり
金借りに來てお座敷に通される
子を抱いてダンスの足を踏む若さ
お仲人と知らずそつけなく帰し
岡山縣　大森苑女

詠史川柳

につぽん (8)

戸田古方

封建社會（續）

（二十一）**わびとさび**（一四—五世紀）

廂の深い夏向きの部屋の小暗くなるのは又やむを得ない。そこから幽玄の藝術が生れる。東山時代といわれるのがその時代である。味覺の如きもその產地をいい當てる所まですゝんでいた。

うつかりと燈籠の苔かきおとし
掃き殘しではない落葉二三枚
逆境の魅力も感じられはじめ

（二十二）**中世都市**（一四世紀）

古くは租調の集散地、莊園の貢物の中継地が都市らしくなつて來たのは鎌倉以後のことである。桑名、敦賀、兵庫、伏見などが數えられる。家內工業や仲買商人が起つて來て人民の時代到來を暗示する。

大坂というは在所で名を知られ
掛引が女の子にも板につき
入船の目ざとくかゞり見つけたり
なれのはてであろうがなかろうが遊女

（二十三）**堺**（一五世紀）

堺を堺たらしめたのが政治的理由であつた如く堺を沒落させたのも秀吉の政策であつた。それ程自然に經濟都市になり切つていた堺は同時に西歐自由市の性格をもち、不拔の町人魂を逸することが出來ない。

庖丁もためぬば作る鉄砲鍛冶
俳諧の緣で浪人拾われる
追立の恨みが殘る堺筋
納屋衆はみんなの爲めに死んだきり
割切れぬ氣持ちのまゝの堺市史

（二十四）**嫁入**（一五世紀）

莊園領主から独立した莊司莊官が大名化して封建制が確立すると対人民の圧力も加わつた。同時に男の女に対する考え方もかわつてきた。それは武家の武力散逸を恐れる精神に起因する。

へろへろ矢でも長男は長男
女の悲劇姑小姑
三つゆびをつくに女はなれそめぬ

（二十五）**戰國時代**（一五—六世紀）

戰國時代は秩序のない時代と教えられて來たが、それは德川政策のためにするがために歪められた結果である。傳統がこわされて、次の創造えの準備時代であつた。

人の隙見抜く技術をかわれたり

（二十六）**一向宗**（一五—六世紀）

親鸞のあちこちにまいておいた種が芽を出し、宗教家であるとともにすぐれた政治家である蓮如がそれを育成し、時流にのる。團結と生存權の主張が一向一揆となる。

門跡は輪袈裟のまゝでねもやらず
寄手にしてみれば氣味惡い鐘がなり
碧恩の懇志の米の荷がとゞき

（二十七）**鉄砲と十字架**（一六世紀）

鉄砲傳來の一五五二とキリスト教傳來の一五五九とは日本歷史が世界歷史へポイントを切換へた重要な年である。向うにしてみれば聖地恢復の十字軍の思想的延長であつて、積極的な最終目標の達成の端緒でもあつた。

檀家皆改宗をして改宗す
洗礼の水お藥りの數のうち
約束の鉄砲積んだ船がつき

（二十八）**安土城**（一六世紀）

信長という英雄が歷史に出てくる。英雄が歷史を作るのか、歷史が英雄をつくるのか、どちらも眞であろうが、秩序恢復の一役にもり上る人民の力を利用した点が見られる。

そろばんが樂市樂座はじき出す
註＝樂市樂座は無稅の市、座、南蠻寺の鐘に信長きゝほれる

（二十九）**障壁画**（一六世紀）

大きな網で大魚をすくうような安土桃山の風潮は豪華の一語につきる。大和絵のせんさいを基調にもちながら宋明の水墨画の豪快が表現されて英雄礼讃の詩をかなでる。

顏料にとかす珊瑚だ水晶だ
臣の座の冷え金箔の照りかえし
千羽鶴委蕊の想がまだ出來ず
ありたけの襖へ描いてびよいと発ち

（三十）**茶室と城**（一六世紀）

その障壁画でかざられたのは近世城郭であつた。城は戰さのためのものであつたが人民威圧の具でもあつた。秩序恢復とともに芽生えた人民の自由はつまみとられようとする。それにつきない抗議をする茶室の傑作がのこる。

大手門大將だけは黃金金具
お茶がすきそして下情によく通じ

社の黑板

▼永田里十九氏が業務多忙のため句会委員を辭された。名句会委員として人氣があつただけに同氏の再起される日を期待したい。

▼亀山晴峯氏に永田委員の後任として句会委員を委嘱することとなつた。

▼本社の句会え新に出席御希望の方はハガキに住所、氏名、雅号等を楷書で認め、本社句会部案內係宛に申込まれたい。句会案內名簿に採錄する。

川雜句會部

女性ばかりの句評 川柳街（上）

麻生葭乃・武部若菜
飯降白香・太田良子
藤本茶々・麻生梨里

よく見れば雑草にさへ運不運

迷宮

一月号川柳塔より

白香＝「よく見ればなづな花咲く垣根哉」＝芭蕉」、忘れられたる存在に温い人間的愛情をそゝいでいる芭蕉、目立たぬ雑草に宇宙の摂理を発見された迷宮さん……共に人生に徹した心境から生れる味をかるく表現されているところに心惹かれます。

若菜＝何でもなく見すごして居た雑草にフト人生の対照になるものを見つけられた、生きとし生けるものゝ苦樂と雑草への人間愛をお詠みになつたものと思ひます。見方によれば面白く取れますが、何か深刻味が胸に響きます。「よく見れば」が芭蕉の句と同じなのは偶然だつたと思ひますが、なづな花咲く自然のまゝの俳句とちがつて、雑草はいさゝか動くのではないかと考へるのは私の間違いでしようか。運を春負うもの余りに多いからです。

葭子＝日頃忘れてかえり見られない雑草に於てさえ然りである。しかも踏みにじられた不運なものでも仲々根強く生きている。

葭乃＝世の中の凡ての物は運に左右せられるのであります。然し運が良いとか悪るいとかいふ事は相対的なもので、下層階級にある人達は上層階級にある人達よりも不運であるとは誰しも考えるのですが、其運の悪るい中にも稍々仕合せな人と、全く眼も当られぬ人とがある通り、見向きもされない雑草の中にもさうした度合の差があると云ふ所を掴んでゐられるのでせう。それはまあよいとして、私はそれよりも、上五の「よく見れば」がどうにも邪魔になるような氣がするのです。白香さんが引用せられた芭蕉の句の「よく見れば」は少しも蛇足であるといふ感じを與えません。天鵞絨の様に見える土堤の草も、鍬で堀り返されて泥ンコになつた草も、私共が日常たやすく眼に映る物であつて「よく見れば」とことわる程念入り物ではありません。勿論作者は心の眼を開いて見れば即ち良く考えて見ればのお積りかも知れませんが、此句では文字通りに受けとるのが自然でせう。次に芭蕉の句ですが、なづなは三味線草とも云ひ、関西ではペンペン草とも云うて、撥形の実を結ぶ細かい花です。すべて雑草は観賞用植物と違つて大抵の花は地味で中には針の先程の花弁が小さな蕚から僅かに覗いてゐるようなのもあります。螢草でもおとぎり草でも繁茂した草叢の中にかくれてゐる時は一寸氣が付かないものです。ですから芭蕉の句の「よく見れば」は非常に生きた上五であつて、又垣根に茂る雑草のさまも偲ばれます。句の観賞といふものは小兒の感受性のやうに、理屈よりも先に神経を刺戟するものであると思ひました。

茶々＝運、不運と雑草に発見された観察の細かい点、人々から厄介扱いされている雑草の中にもスクスクとのびて行くもの、踏みにじられてもまだ伸びんと戦つているものゝある事を、そのまま人間生活に持つて來られると成程深みもある様に思ひます。けれどもこのまゝサラッと読んだ時「あゝそうか」と思つただけでした。それ程雑草に対して無関心だつたのですね。「よく見れば」は何だか取つてつけた様な感じがします。雑草に対して一つの句を作るのにわざわざちつと見詰められたでせうか「よく見れば」と「雑草」とが掛離れているように思うのです。唯漠然と「雑草」としないで何か草の花とかを入れゝば「よく見れば」もつり合うと思うのですが、白香さんの引用せられた芭蕉の句はほんとに調和のとれた立派な句ですね、「運、不運」と大ざつぱに詠まないでもう一段掘り下げて具体的に表現された方がよくはないでせうか。

梨里＝「よく見れば」は勿論「考えてみると」の意味に用いてあるのだと思ひます。然しこの場合「考えて見ると」と言うような言葉はあまりにも説明的だと思ひます。「雑草にさえ運不運」とこれだけでも充分内容は出來てゐるのですから、これにもう少し色をつける言葉を添えたならゆとりのある句になつたでせう。川柳は詩ではないと言う一部の人の説もありますが、川柳は単なる報道記事ではないのです。総て文学と名の付くものには幾らかの詩情がなければならないと私は思つてゐます。勿論川柳、俳句、短歌、小説と言うやうに名が異る通り、内容も形式もそれ〴〵一般に言う所の詩と同じではありませんが、多少の詩情は含まなければ何の面白味もなくなつてしまいます。さう言う意味でこの上五の説明的な言葉を何かこう言い切つてしまつたような言葉でなく余情を持たせたらと思うのです。まして文学では「雑草のように強く生きる」とか「雑草のように踏みにじられる」とか人世を雑草によつて言ひ表はすことは言ひ古されてゐるので、尚更「よく見れば」が蛇足のような感じがするのだと思います。

恐わい風だつたと雀しやべり合ひ

豆秋

十二月号川柳塔より

若菜＝巧まずして擬人法の優秀句だと思います。雀が全く自然に詠まれていてほゝ笑まずにはいられない情景に詩的なうるほいを持ち、柳味豊かな作品であると思います。他の生物をもつて來ても失敗するでせう。最初読みました時から好きでこの句を提出いしました。

白香＝雀といえばすぐに一茶の「しよんぼりと雀にさへもまま子かな」「むつまじさ二親もちし雀かな」の句をおもひ出します。この一茶の雀と豆秋氏の雀とはあま

りにも対照的であります。くびをふりふりおしやべりを忘れぬあのほゝゑましい稚氣濃々の小鳥の姿が吉原すゞめといはれて、姦しさの代表語ともなつたあの雀の姿が夢寐として思わず笑わされます。豆秋氏の持味がよく出ていて軽みと機智の表現として柳味滲々たるものを感じます。

馥乃＝私は此句で群雀の囀りを思ひ起しました。何羽とも数知れぬ雀の囀る時には必ず、先に音頭をとる雀が一羽居て、其一羽が「チユン〳〵チユチユ」と唄ひ出すと、それに続いて全部の雀が一斉に声を揃へて囀り出すのです。そして又、一斉に其コーラスは止まつて終うのです。まるでタクトを振つて居る指揮者がゐるかの様に、只の一羽も囀り残つてゐるものはありません。囀りを繰り返すたんびに此の「チユン〳〵、チユ〳〵」がきつかけとなるのです。私は嘗てこれを句にしようと思ひましたが其情景に魂を奪はれてゐましたので、とう〳〵一句も穫ち得られませんでした。川柳家は何処までも冷静でなければなりません。然し私が聞いた雀の囀りは「騒ざ合ひ」と云ひたい位でした。豆秋さんの句ではしやべり合ひとありますから、せい〳〵五六羽か十羽位だつたのだらうと勝手にきめてゐます。

茶々＝雀といえば折角の日曜を朝早くから起す情のないやかましい小鳥位に思つて居りましたが、こんな可愛らしい見方があつたのですね。私もせい〳〵五六羽位だと思います。啄をつき合して囀つている様子が目に見えるようです。雀は俳句などにも沢山詠まれて居りますが、こんなにも雀というものを自然に、柳味豊かに詠まれたのには感服の外ありません。そこでこの句とは別に作句の揚合「……どうする」「……どうした」とかとを入れる事は説明的になりやすいし、リズムに缺け、又ずるいやり方だとよく言われるのですが、私は作句上表現のし方にとを入れた場合でもぴつたりと句にはまり込んで居れば、決してリズムも悪くないし、ずるくもないと思うのです。唯余程考えて用いませんと説明的になる場合はあるとは思います。豆秋さんの句のとはその点少しも邪魔にならない程はまり込んでいると思います。

夏子＝軽快なスケッチ句、雨上りなど電線に数羽とまつて囀り合つているほゝえましい情景が目にちらつく一面、その雀はその辺のよく喋べるおかみさんを想像させているが、その点では他の如何なる動物よりも対照がぴつたりと来て面白い。

梨里＝成程、此の句は本当の雀のことなのですね、ジエーン畦風の後で危く我家の難を逃れたおかみさん達が、よい話の種が出来たとばかりに隣近所の人を相手かまわず捕へて、お喋りをしている様子を詠んだもので、人間の女を雀と言い切つたのだと思つていたのです。この句は二様にとろうと思えば取れるのではないかと思うのですが、或はそのどちらにも懸けてあるのかも知れません。雀を本当の雀と考えるのと、女の代名詞に使つてあると考へるのとでは、大変に句の價値が変つて来ると思います。女達のお喋りの様子を詠んだものであるとすれば、たゞそれだけの句になつてしまうし、本当の雀であると考えれば川柳的で且つ詩情豊かなよい句だと思います。然し私も前評によつて、本当の雀だと考えるのが妥当だと思います。私がこの雀を女の代名詞であると早合点をしたのは都会生活ばかりして来た私には、雀を見ることがあまりにも少なかつたためであるかも知れません。

若菜＝「しやべり合ひ」の語から来る連想で雀以外のものをお感じになるのはよいとして、ほんとの雀である所にこの句のよさが生れたのです、そして雀が何もさう申したわけではなく、柳人豆秋さんが句の上に雀をしやべらせたその手際のよさが、畦風と結びついたところに人間おしやべりの代名詞でないこともハツキリしていると思います。馥乃奥さまの言わるゝ通り五六羽で、都会の軒先にさえずつている雀であることがわかるのも面白いです。この句は雀をクローズアツプさせないで畦風直後の氣分を意識して観賞すべきでせう。多くの畦風を詠まれた中に光彩を放つものとして深く味わいました。

白香＝私はこの句はどこまでもユーモアの句としてみたいです。豆秋さんでなければ出来ぬユーモアの句として高く價値づけます。勿論底に或は潜在的に豆秋さんの皮肉が埋盤とはなつていませうが。

女房の視界の中にある呉服　翠光

二月号川柳塔より

茶々＝道を歩いていて、ふと目に止つたウインドの反物に兼て自分が欲しと思つていた柄があつた時、今度はこんな着物を作りたい羽織はあれがいゝと果ない望みを持つて眺める妻のいじらしい慎ましい氣持がよく現れていると思います。「視界の中」という言い廻し方は流石老練さだと尊敬致します。

梨里＝確かに頂ける句です。茶々さんのおつしやるように「視界の中」と言うのが効いている。主婦の胸算用の中にはあれもこれも要るものばかりで、とても自分の着物にまでは手が届かない。然し矢張り女であつてみれば衣裳の欲しいことには変りがない。飾窓の中の素敵な着物、色と言い、柄と言い丁度あんなのを着れば吃度よく似合うのだけど、あゝ素晴らしいなあ、咽喉から手の出る程欲しい着物も今買えない家計の狀態を思つて默つて見ているだけの妻の様子が夫の瞳に如何に映つたか？薄給の身か、或は金詰りか知らな

同舟近詠

金沢　安川久留美

沈默の信ずる者は己れのみ
落椿役目果したかの如く
還暦じや共産党は大嫌い

路郎氏へ

第五句碑將介石もお叩頭しやう

松山　前田伍健

別荘の戸がみんなあくうらゝかさ
藏の戸の重さ祖先の重さなり
戸に触れる竹に寝られぬ寺泊り
スキトピー春の雲でも招くのか
美術品ですと日本刀手入れ

大阪　橋本綠雨

掌の美しさ何をしまんの
人生の予算がたゝず一人で居

長崎　池田可宵

子をおもふ余り時勢をいきどをり
酒ぐせの悪い隣をくすりにし
それ程の男の指輪嵌めたまゝ
満にしたものか数へ年言をか

近作柳樽

路郎選

昔なら清貧とでも云へたのに　今治市　長野　文庫
内容はミシン工場の女学院　同
告訴沙汰昔惚氣を言つた仲　同
背廣服頭の中が知れる柄　同
指令出す部屋にストーブ燃えさかり　同
その下に鎧を着けた平和論　同
声を頼りに盲人の恋　廣島縣　黒本　芳泉
ゴシップへ女笑つて酌いでくれ　同
寢煙草の女の指の僞ダイヤ　同
恋人に星座教へる肩を抱き　同
あれ程の試合へ下手なアナウンス　同
靴磨早仕舞する札を読み　同
どんどどんさんどおよを義江に遠い声　荒尾市　蒲原　元祿
誘惑に打ち勝つほどの野暮でなし　同
末席の茶菓子さつさとつまゝれる　同
夢のようですと芥川賞をうけ　同
このときとばかりに燃えたような火事　同
勘違ひと知つてビールがにがくなり　布哇　滝　純香
長居せぬつもりで子供連れて行き　同
頭から月賦で買へと見くびられ　同
十仙に引上げられた子の無心　同
僕一人雇うに余地のない都会　愛媛縣　八塚　紫邑
雑役をさすに履歴書二枚書け　同
思切り背伸びをしたシャツが裂け　同
曲がります御注意通り皆よろけ　同
大阪の義理を果した粟おこし　兵庫縣　赤木　紅山
老眼に落穂大事にひろはれる　同

車掌さん札でよごれた手を洗ひ　同
親指の力で立つて映画見る　同
吾が好み覚えておりし宿に脱ぐ　呉市　松永四季無
残業に酒が出るのとつねられる　同
養子だと言はれたくないハシゴ酒　同
破産して妾宅だけが残つてゐ　同
二号邸喧嘩する日が勤めの日　徳島縣　廣瀬志津雄
つるし柿のような化粧が踊つてゐ　同
夢にさへ出てくるものと今日別れ　同
金は貸す金は貸すけど話きけ　同

妻初姙娠

十ケ月先を樂しむ日々になり　東京都　石居　高志

伯母他界

葬式の仕事は男だけでやり　同
焼香の番だと尻をつゝかれる　同
同伴で行けばマダムの白々し　同
ねがえりをしてもタンスのそつて鳴る　愛媛縣　村上　鈗明
Y談をきゝ聞き女編みつゞけ　同
きこえないまゝ相槌はうつて置き　同
恋は恋などゝ見合にもでかけ　同
お妾を置くかいしようもない浮氣　愛媛縣　村上　和子
一人して支える意地が寂しすぎ　同
掌の冷たさ一人思案する　同
何かしら唯寄り添つて居たい春　同
温泉の便りいらない人に迄も書き　石川縣　山田　陽々
旅館から女工の様な妓も帰り　同
残つてる妓でもいゝかと念を押し　同
御世辞がよくて冷酷無情なり　同
押賣へ極道息子役に立ち　兵庫縣　吉原　紅月
アベックでおいでと城の天守閣　同
小便をこらえてお経やつと済み　同
仕事などするなゝとジャズバンド　同
女さえ生きる仲仕の荒仕事　大阪市　木村　草々

いが、女房の視界の中にあるだけで買つて欲しいと言はない所を見ると、何れ懐の寒い夫でもあらうか、一儲けしたら買つてやりたいと思つたかも知れない。妻も夫もお互ひに默つてゐるが心の中に何か温いものが流れてゐる人情味のある句だと思う。然しこう言う女性心理は十人一様なので見付所は新らしくない。

白香＝久しぶりに妻をつれて心ブラをする。懐さむい夫の内幕を知つている女房にとつて買つて貰えるといふ様な心は毛頭ない。流行の競艶の如き飾窓を見ては自ら心が動く。これは人間の心理である。豈女のみならんやで「一寸まつてれ」といつてはあちらの飾窓こちらの飾窓とのぞき歩く瞳は呉服の美に眩惑されている。然し所有欲としてでなく唯呉服美としてのみ。せめて見るだけでも樂しまさしてといつた心持で……。これを客観的にほゝえみと恐怖をもつてながめている夫の眼が妻の姿を追つていく……こんな光景がこの句から連想されます。恐怖と愛情と皮肉の融和した句だと思います。

良子＝お金があつたらこれも買いたい、あれもほしいといふのが人々の氣持。まして女であつて見れば流行もあり尚更の事、ここでは女房とある以上夫の妻に対する愛情とでも云うものか、或は又反対に「この間買つてやつたばかりなのにまだ欲しいのかなあ、女といふものは」といふ氣持を詠んだ何れかだと思いますが、まア〳〵前者の意味の方が強いでせう。着眼点は新らしい事はないでしようが、これだけ思うことをスラリと詠んだらと羨ましく思います。

若菜＝この句の價値は「中七」にかゝつて居ります。薄給者や金詰りは津々浦々と申し度い時で、この句の女房もたゞ視界にのみ止めて諦めている。或はおれだりをされたかも知れない夫が愛情のほゝ笑で女房を客観的に表現したものと思います。着想は古くても時代によつて表現の仕方が新らしくなつて行く所に又句の生命も若返るので

母の供一駅だけの地下に乗り　同
毛糸針大阪までの二十分　同
湯泉の鏡処女に別れる感傷か　同
運動会通りすがりに一寸寄り　岡山縣　小林　鳴子
お客様大きな嘘をついて去に　同
招んどいて欠伸もよほど待たせ　同
母さんのせいにしておく乘り　愛媛縣　渡辺　曉童
煙突の高さの山わ雲をもち　同
しよつぱなからきゝ手でるも又樂し　同
お風呂から眉のない顔もどつて來　東京都　梶本　梅香
義理だけで濟ます見合ひに緣があり　同
雪かきに女房の力見直され　同
悪童の焚火の群に犬もいて　倉敷市　木村千代男
じようだんも言えず謹言居士で老ひ　同

エイ山心中

決勝へついて寂滅爲樂かや　同
口惜しいが若干親の脛かじり　荒尾市　宮崎　馬笑
雨だれも愉のし今度はドレミファソ　同
天職は哀なし他人の錢を読み　同
二十過ぎても菓子の分け前　愛媛縣　村上　旭堂
外交員私用で來たを逃げられる　同
はなみずえふと父親の歳思ふ　同　小川　青泡
年取つて女の慾も堂に入り　大牟田
窓しめてたつた二人の部屋にする　同
雰囲氣に醉うた女の度胸なり　同
犬小屋が二号の案も入れて出來　廣島縣　高島　玉兎
遺傳ですなどと息子は呑みあるく　同
本人も入れて五票で村議落ち　同
デザイン集通りに裁つて妻若し　荒尾市　山崎青粒子
偉そうな顔も來て居るストリップ　同
冬服の破れかまわぬ税が來る　同
酒ならば末の子がよく使する　熊本縣　西野斗四翁
またお産あれで戰爭未亡人　同

こわい程下宿のシャンが寄つてくる　同
肥り様借金だらけとは見えず　和歌山　浅川　桑南
値下りえ鷄押合うて產みはじめ　同
花嫁の字にはなじみの郵便夫　同
療養所まで見せに來るランドセル　貝塚市　津田　千舟
女の子ばかりで先が案じられ　同
轉ぶ妓と轉ばない妓と入れ替り　大牟田　新谷　風浪
文化國家こんな道でもバス通う　同
理髪師の暇は夫婦で顔を剃り　同
うつむいた婦人あくびをしたらしい　同　東　初奈里
裏切れば君ソビエートかと謂われ　貝塚市　同
白狀をさすのに嫉妬心もあり　同
春の日を大劇折れて〳〵待ち　同　村上　貞子
過去をみなさらけ出してのむ煙草　愛媛縣　同
水の面がゆれてる夢がゆれてゐる　同　同
貧しさへ母のやつれを灯がまとも　貝塚市　染井英美夫
お相伴でも写して欲しい女心　同
燒香の寡婦のうなじの眞白さに　同
人待顔に女時計を捲いており　同
一日の疲れへヤールこれ〳〵です　岡山縣　田垣　方大
愚痴も法螺も妻は默つて聞いてくれ　同
生活に負けた帽子のかぶりやう　同　香木凡太郎
父ちやんがビツクリ箱でなほ泣かし　貝塚市　同
賣る品へ母はいはれをこまごまと　同
寢ころんだまゝ毛糸を持つて來た　同
氣に障つたらしこめかみ動きたり　岡山縣　岡田　夜潮
出來事を口早やに先づパパに告げ　同
唄を出しおくれちび〳〵飲むばかり　山口縣　岡本　鳥石
年頃の笑う事まで母に似て　同
更ける灯に人を恨まず縫い続け　同　山本　焦兒
一度だけですよとキツスなれて居る　同
競輪へ朝の元氣をとられて來　同
シンガーで技術とやらを見せ給え　同

はありますまいか。むしろ女房といふ字が耳につくのかも知れませんが、感覚的に見て仕方がないと思います。この句に淋しみや悲しみの響きがないのは翠光さんだからでせうか。

霞乃＝女は皆晴服に興味を持つものでありますが、視界の領域は万人一様ではありません。先づ大まかに分けて見ますと第一は経済的に柄よりも布地の上質、優美なものを欲する人、第二は自分の顔にうつりよい色目や柄を望む人、第三は流行を追うばかりでなく自分の容姿や性格の缺点までも補うてくれる品でなければ承知出來ぬ人といふことになりますが、此第三に属する婦人は配色にかけても相当のうるさ型で此反物は太陽の光では鼠色だが電燈の光では若竹色になると云う所まで研究を積んでいます。然しかう云ふ婦人は同時に購買力も伴うので翠光さんの句には当てはまりません。先づ翠光さんの句に表はれた女房の視界は第一第二に属するものでありませう。皆さんは此句に対して夫の氣持ちまでもとやかや云うていられますが、此句は買えもせぬ反物にあの柄がよいとか悪いとか云うてゐる女房を傍観して「女というものはあゝした夢を持つているのかなア」と云つたまでのことで、妻えの思いやりが表はれているものとすれば一割か二割位であとの八割か九割は單に女の晴服えの憧憬を詠んだだけのことだと思うのです。それはあんまりアッサリと云ひ放つた客観描写でありますために、さうした感じを私に與えたのかも知れませんが、私は皆さんの批評を拜見して少し女の思いすごしではなかろうかと考えました。

（以下次号）

にきびとり美顔水
綿谷雷天堂

姑も民主々義には押され氣味　同
不渡手形社長は用が多すぎる　鳥取市　森本法泉子
車中から打つ電報は言い逃れ　同
働き盛りをお経などおぼえ　同　大家　夢成
隣席は終点迄と云ふ寢方　岡山縣
鼻声で呼ばれた時代も有つたのに　同
大根を切る音さへも主婦らしく　同
虚栄まだダイヤに迄は至らざり　大阪市　山本　葉光
微笑から悲しいこゝろみてしまい　同
脇役で昔のスター生きてゐた　同　若狭　狂風
病人が出來た家計簿痛々し　京都市
弁護士の職へ無口な妻を持ち　同
金借りた義理へマッチを擦つてゐる　同
差押へされもせぬよな家でした　熊本縣
合格の吾が名母何んべんも何んべんも　同　岡本　昇月
死ななけりやならないような恋でした　同
余生とも云えず地下足袋定期券　和歌山　秋月　宏方
鶯の聞ゆる職場のありがたし　同
よいからだほめたを女喜ばす　同
嫌がりを謂つて困つた眼のやり場　出雲市
ひねくれた柱に何の風流や　岡山縣
子もいつかかつぎ屋として成長し　同
子に頼る父の姿の老ひて來し　同
ポスターは好い景ばかり寄せて書き　宇治山田市　松森　卯門
失業に馴れ内職にも馴れて　同
失業の今日も見て來た人通り　石川縣　塩谷三思楼
年頃の電話に笑う事ばかり　同
親子では酒のうまさがチトちがひ　岡山縣　永井　哲夫
人間のつくりし物が動きかね　同
七いろにネオンがかすむ若さなり　長崎市　石井　青馬
冗談に見せた手相が氣になる日　同
晩酌の量は家内が加減する　愛媛縣　堀内　暁風
混浴の湯氣の向ふのつゝましさ　同

女医休診裏で洗濯しています　大牟田　小川　雅人
女工哀吏先輩の話聞く　同
マスクから腑に落ちぬまゝお辞儀され　長野縣　高峰　柳兒
夫婦して大袈裟に小兒科医を叩き　同
一家心中あってホテルが世に知られ　愛知縣　松尾　北雷
税務署の家根まで冷くとがり居り　同
課長ふと組合側になりとなり　大阪市　佐野　牛歩
制服の乳房の上の校章よ　同
いつの間かチップに踊る身となりぬ　堺市　丹波　太路
調剤のやうに唐辛子屋の匙　同
未亡人すすめる煙草もラッキーだ　大阪市　長谷沢義英
一週忌別荘旅館に早変り　同
記念樹へ恩師の年をきいてみる　今治市　柴田　青雨
三等車算盤と算盤はなしてる　同
仲人の言ふ十人並でまだ賣れず　大阪市　長田　塗杖
くたびれた草履も落伍したしるし　同
天理説く山羊ひげもいて汽車のるし　米子市　石尾　鈍頑
昇給の心祝いにステッキを贈う
ステッキは按摩のほどに役立たず　同
成績は悪うてもえゝ女の子　岡山縣　水谷　谷水
美人ではないが素性はあらそえず　同
アベックの花見は奥へ〳〵行き　出雲市　原　一月
トレーラーがバックで曲る文化都市　同
学生と知つてか米兵話しかけ　吹田市　橋本　幸男
老人の同窓会は犬を連れ　同
裏道の多すぎるのも人生か　大阪市　西川　惠風
少女小説とやらを読みふける子を持つて　同
絵ハガキに無事だとだけの二三行　堺市　赤松てるを
スナップは見知らぬ人と写される　同
横柄な言葉貫録示す氣の　岡山市　平岩　作州
惚れた娘につむじ曲りの親があり　同
恋人が來るまで手術のばしとき　岡山縣　田中　敬貢
借金があるのに花へ酔ひつぶれ　同

雑筆春秋

奥歯に残る話題

尼　緑之助

某教團の人が三人熱心に話し合つてゐるのを聽いてゐたが、信ずる者の幸福さ、阿呆らしさに春宵の一とゝきを過した。又とんでもない教義をふりかざして家庭争議までやってゐる人が近所にある。宗教にも信者にもピンからキリまであるなと思つたことである。

ところが川柳にも同様な解釈や作家があり、他人から見たら嘲笑されるのも無理はないとも言えるのだ。何れの世界に於いても玉石混合は免れず、互に脚下照顧の要はある。

扨、私達の地方機関誌「いずも」に寄せられた出雲市長森山繁樹氏の「川柳を屬しる」の一文は「そとから見た川柳」で——人情風俗を十七字によって表現する短詩であるというが、近代の生活はその背景に複雑な社会性を持っており、とても十七文字なぞで表現しつくせるものでない……」其他思ひ切った言葉でけなされ、川柳人の反省を促すとある。桑原武夫の第二藝術論に輪をかけての直言にはいさゝかへキエキをした。

この説に対しまともにぶつかることは地方に於ける一の出來事として一應取り上げないが、他からみた宗教のように一度は顧

人間の歩調にあはせ雲と水　長崎市　山崎　夢路
國宝の寺院に入れば空屋の香　鳴門市　同
今の身にあんまり痛い故郷の風　大塚五厘棒
行詰り抹茶をほめたしほに立ち　岡山縣　水田　草骨
入学式もう起こそうか起こそうか　同
学歴をつけて親父が見下げられ　大塚美能留
先方が断つて來たいゝ女　岡山縣　同
地下足袋の底に余寒がまだひそみ　田村　孤峰
春の風女世帯の淋しい日　愛媛縣　同
花に逢い互に無沙汰がち同志　辻　白溪子
特賣場良人しばらくほつとかれ　米子市　同
引越しの挨拶夫婦でくる若さ　大倉　四案
蝶々はこの花園を迷わすや　岡山市　同
疎開地へ純毛づくめで行つてみる　横田　方眠
花・リンゴ・玉子の中で虫の息　大阪市　同
默否権ではなし云ふこと知りません　片山　百郎
日雇の笑ひ忘れた雨となり　岡山縣　同
ゆかいさはライバル事業に失敗し　瀬口　安彦
失恋を踏台にして身を起し　熊本市　同
出世慾卑屈な男にしてしまひ　小西　雄々
世話好きで割勘集めを頼まれる　米子市　同
卒業を待たず背廣を着て通い　松井　蛙声
一豊の妻と云はれる不仕合せ　東京都　同
四年前見せた笑顔で候補來る　藤岡　鱒三
カンだツボだと言うのと音樂を話す　米子市　同
寢るに迄必死になつて小供寢る　河島　露外
そんな手もあつたかと言う負將棋　岡山縣　同
死ぬる氣で稼いできなと旅費を出し　浜口　不精
友逝くの報へ私しも病床ですベッドで　貝塚市　同
啄木の詩集を持つた夜の花　坂井　三葉
混雑に又スピーカー念を押し　岡山市　同
家出した娘を想ひ麦を踏む　愛媛縣　柳原三多楼
栄の花に春を負けじと葱坊主　大阪市　藤本　小柳
恋なぞとほざいた事も忘れはて　大阪市　貝塚谷恒良
車中では凛々しき姿スキーヤー　高知市　松下一徹郎
晩酌の無き夜の訳を子に訊かれ　光　市　加川　靖郎
合掌の雑念さるにまだとほし　小野田　加藤　司楼
頬染めて逃げたあの娘は隣の子　宮崎市　野口卯之助
ユーモアもまじえ仲人如才なし　和歌山　田和みのる
隣室は恋人らしい見舞客　熊本縣　鹿本　実信
情慾も嫉妬もあつておらが春　愛知縣　岩瀬　雨蓮
読経を樂しむ夫婦となりにけり　愛知縣　津川　竹坊
お経すめど足の痺れにすぐ立てず　愛知縣　石田　春童
病むいのちあたゝめくれし姉の筆　兵庫縣　太田　劍坊
輪たくが案内役の安ホテル　愛知縣　大家　笑平
進学へ父親おろゝ母おろゝ　岡山縣　尾崎　久平
念佛もお経もみんな口ぐせに　愛知縣　井野　格一
履歴書へ先輩の智恵も少しいれ　岡山縣　原　独仙
ハイヒール糸へん勤務茨やまれ　出雲市　平岩寛太郎
お経とはたゞ何となく眠いもの　愛知縣　野田素身郎
春來るというに二人は別れたの　倉敷市　沢田　吐泉
役得え首の廻らん事をして　出雲市　中谷葉栄子
女中は嫌ですと職業紹介所　大阪市　池田　古心
余りたる予算の残り酒になり　岡山縣　石橋　莽兆
派手暮しだつたと思もや空家なり　出雲市　照屋ひろし
啄木の歌口づさみ金づまり　兵庫縣　田村　綠朗
起こされたうえに借られた夜のつらさ　岡山縣　重田　峰秀
父さんのチョイナ〳〵に子がうかれ　山口市　西山　秀峰
倦怠期もう茶色なりマスコット　岡山縣　森山　壯
妻の様な叱り方をする女弟子　出雲市　永田六竜子
外人と歩けばパンパンの様に見え　大阪市　岩田　柳亭
入学へ母が行く程氣を揉ませ　大阪市　三木　秀雄
新聞記事今日はどなたが殺された　大阪市　林野　柳好
送別会でたらめだけど歌つてる　呉　市

みることも無駄ではなさそう。本誌四月号で路郎先生も「二つの話題」で週刊朝日の記事に対するハンパクを一應見送られてゐるが、あれこれ奥歯に残る話題である。

作句と選者の苦労

山本　葉光

路郎先生の「春の窓」で「七面山とへとち」氏の、肉体川柳と恋と女の句を作らぬ、と言ふ事に対して、先生の選句の立場を論じられてゐる。味ふべき文章である。

我々が川柳を作句する時に、狂句にならぬようにとか、説明的な、そうですか、の句にならぬようにとか、種々の心づかひをする。そしてその中からいつの間にか、個性らしい句が、生れるものである。多作をやつてゐると、自然にそうした事が、よく理解出来るようになる。

だが、僕のような不自由な生活をしてゐると、〝作句上の材料のせまい見聞では無理が多いので、苦しまぎれに、破調の長いのや短いものを創作して見る。柳誌によつては、そうした苦しさを無視して、その柳誌調のみを選抜する選者が多い。選者は、本当にむつかしいものだ。特に雑詠の選は、路郎先生でも苦労されることが泌々わかる。

1姫 2太郎 3C.C.C.
山之内
強く立派に育てるため
あとはストップ…確実な避妊樂サンシーで！
サンシゼリー

「光」か「川雑か」

麻生路郎

物の値がグン〳〵暴騰して、アレヨ〳〵と云つている間に、一銭單位が一円單位になり、長屋のおかみさんが一万円の二万円のと口走るようになつた。その頃川柳人も「肥車十万円の牛が挽き」（宏方）や「佛さんこれ十円の饅頭です」（豆秋）のように盛んに、物の値を川柳に詠んでいたが近ごろは一寸下火になつた。しかし下火になつたからと云つて物の値が下つた訳ではない。單位がズレて上位で少しく落ちついただけである。こゝで一寸、本誌の定價と他の物價との釣合いがどうなつているかと云うことを書いて見よう。考えようによつては面白い問題である。

大体、「川柳雑誌」は営利を目的としないので、一部三〇円、外に三種の郵税が三円、詰まり三三円で読者の手許えお届けしている。安いからモット値上げしたらどうですとよく云われるが、一人でも多くの人に読んでもらいたいので、なるべく値上げ問題には触れないことにしている。

しかし、どんなに安いか、一寸他の物價と比較して見よう。

「川柳雑誌」は元三〇銭だつた。その頃郵税が一銭だつた。インフレ時代の値上げから今では雑誌が一〇〇倍になつているが、郵税の方は三〇〇倍になつている。大体以前は映画と同じ値段であつたが、近頃の映画は邦画六〇ー七〇円、洋画一〇〇円であるから、雑誌の二倍乃至三倍强である。十銭の漫才が一〇〇出さぬときかれない。一銭五厘のハガキが二円になり、三銭の封書が八円になつている。十本入のバット七銭であつたものが廿本入で三十円になつている。これなどはおほかた税金だ。タバコとの開らきは兎も角として五銭の風呂賃が十円になつている。その比率で行けば「川柳雑誌」は六十円でなければならぬが、その半額である。安いと云われるのも尤もである。

電車賃が六銭が八円になつている。十銭のコーヒが六〇円するし十銭で壽司が買えたものが、近頃では九〇円から一〇〇する。米が統制になる前は一升四七銭であつたが、近頃は配給米で七〇円、ヤミ米で一六五円だ。ネギ一把一銭だつたのが五円もする。豆腐一丁六銭が十五円で形が小さくなつている。三銭五厘位した玉子が十三円している。これは時季によつて十八円もする。雑誌に例をとると「文藝春秋」の五〇銭が九〇円になつている。それでまだ他誌に比べれば安い方である。

斯うしていろんなものの値段と比較して見ると、一々パーセンテージを出すまでもなく「川柳雑誌」の安いことがハッキリと判るであろう。しかし、幾ら安いからと云つて買溜めをすると云う性質のものではないが、二三册買つて同好の士や柳人以外の人達に贈ると云う手もあるので、低價政策が文化運動としての目的達成に大いに役立つていると云うきんじは持つているのである。こんなにも安い「川柳雑誌」が月に一回「光」一ト箱の節約によつて購読を続けることが出来ると云うことを声を大にして知らせたいのである。

窓口（1）

「川柳塔」「近作柳樽」「各地柳壇」等の選や採録を殆んど私一人でやつて来たが、しかし、いつまでも私一人でやると云うことが、段々不可能に近づきつゝある。仮りに私の選句能力が続くとしても、月々の出句数が逓増して行けば、限定された期間内に選句を果すことが量的に不可能になる。私の選でないといけないと云われることは私にとつては寔に光栄ではあるが、前述のように量的に選了することが出来ないところまで行つた場合に、これをどう処置したらいゝかが問題だと思う。

一つの雑誌に句を採録すると云うことになると、これは仲々難かしい問題で、君もやれ、僕もやると云う、所謂寄合世帶式や総花式では玉石混淆の不雑なものにしかならない。と云つて私の好きな句だけいただきましたと云う採録振りでは、寄合世帶の選よりは多少の純粹さはあるとしても、雑誌と

靜動

▼本社句会は四月七日午後六時から大宝文化会館三階で開催、遠来の参会で盛会▼川雑大阪南支部句会は四月十八日午後六時から阿倍王子神社で開催▼大阪逓信病院鳥ケ辻川柳会は四月廿一日午後二時から三階図書室で開いた▼南区医師会文化部川柳同好会は四月廿四日午後七時から弾正居で開催▼一路会句会は四月十四日午後二時から高島屋飯田株式会社で開催▼南海電鉄川柳会は四月廿六日午後五時半から南海高等学校階上で開催▼川雑大和支部（奈良縣）主催高田市後援の大和高田川柳大会が四月九日午後一時から高田市社会館で開催され盛会裡に五時散会▲路郎第四句碑建立、川雑備前支部三周年記念川柳大会が四月廿二日午前十一時半から岡山縣和氣郡吉永町福満の大森娯句樂居で開催各地柳人参集盛会だつた▼川雑京都支部復活句会が五月三日午後一時から左京区眞如堂に於て開催される兼題「痩腕」路郎氏選、「親心」蘭華氏選各三句、投句は京都市左京区淨土寺眞如町四、村松夢裡氏宛以上何れも路郎主幹出席▼川雑北大阪支部句会は四月十六日午後五時半から梅田OS劇南へ東入正法寺で開催▼交通局川柳会は四月十三日午後二時から天王寺運輪仮泊所で開催▼川雑岡山支部句会は三月廿四日弘済ハウスで開催▼川雑弓削支部句会（岡山縣）は三月三日弓削小学校で開催▼津山商工まつり協賛縣下川柳大会が四月十五日正午から津山市山下兒童相談所で開催された▼川雑竹原支部（廣島縣）では支部同人として活躍されていた竹原駅長の福岡業郎氏が駅長を勇退して廣島へ帰えられるので四月六日送別句会を開催した▼高岡產業傳協賛北陸川柳大会が四月廿九日午前十時から高岡市櫻馬場・赤波佛教会館で開催されることになつた。懇請によつて路郎主幹が出張される運びになつていたが都合により参加を中止された▼川柳角力大会記念がZK主催で三月十八日に今治東宝劇場に於て開催満員だつたとのこと▼電光川柳第一集が電光川柳を採録して四月上旬に毎日新聞社事業部報道課から刊行された▼白鷺城川柳大会（姫路市）が姫路市観光協会とふあうすと姫路支部共催で四月十五日午前十時から白鷺城千姫御殿で開催▼大谷五花村氏（鳴島縣）は宇都宮の前田雀郎氏と山形縣の菅野松風氏を迎え三月廿一日に句会を開催されたと▼沖宇部晴風寮小集（山口縣）が三月十八日に開催された▼川雑篠山支部（兵庫縣）では支部同人の川柳を漫画化し、篠山新聞の誌上を飾り川柳の普及につとめている▼山陽新聞紙上の卿土自漫コンクールへ弓削駅前の路郎先生の句碑建設が写眞入りで掲載されたと、尚近い内に駅長喜多八氏の斡旋で駅頭に電燈がつくので夜目にも鮮かに句碑が人の眼を楽しませる事となるそうな

してのよい成長を約束することが出來ない。処で、本誌の句の選評が実際問題として量的に私一人では到底続けられないとしたら、どうしたらいゝかと云うことである。

私は昨年から、このことに就て苦慮を続けている。そして「近作柳樽」の選句を不朽洞会員の一人にやつて貰いたいと云うことをはかつたが、どうしても應じて呉れないので、次いで他の一人へ話を持つて行つたが、コレも頑として應じて呉れない。と云つて、誰にやつてもらつてもいゝと云う訳にはいかないので、相変らず私が無理と知りながら無理をつゞけているのである。そこで、作家の側と意見の交換をやつて、何んとか善所したいと思うので、私宛に名案をドシ〳〵寄せていただく事にした。（路）

プールグの達私

大阪市南區医師會文化部川柳同好會と云う長つたらしい会名で、会員はお医者さんばかり。この会が生れてから三年目だが、インテリ揃いだけにもう相当なものである。（編輯局）

路郎師に教を乞うて二年生、一寸柳談でもやらかそうかと言う我々である。所は大阪谷町の無名林居、時は三月二十日の夜。「三階」の席題に頭をかゝえたあげくの果が、流石の名國手連もサジを投げるかに見えたす前、路郎師の一声で、瓜平氏の句会スケッチとあつて席題に及ばず、先ずは一と息、破顔と微笑の交換、やっかいな弟子達ではある。

先着の師を囲んで無名林、一哲捨舟、弾正、瑞川、迷路、珊枝郎が顔を紅潮させての柳論、迷説、社会談の放列を敷く。今夜の企画生々庵氏の中途退出が一抹の淋しさを想はした。スケッチの瓜平氏もこんな句会は珍しいとアッ氣にとられてゐる。ああそうでしょう。兼題の「マダム」「講演」の入選句の発表でかしこまった複雑な表情のスケッチがこれです。これに烏耕、虚水氏が加われば先づ海千山千の名物男の出揃ったと云う感じであるので、後日、瓜平氏を煩はして生々庵、烏耕氏をキャッチしてもらつた。

生々庵＝申す迄もなく不朽洞会の名理事長、我尊が先覚指導者。愛称を鰻谷の「そばや」と云う。

無名林＝文樂の親父で通っている。人を茶化せねば飯がのどを越さぬ。

一哲＝日数の少い彦左衛門。通称長堀大学の総長さん。

烏耕＝難波の羽左右衛門。今でも役者と人は見る。

瑞川＝生れた時は口が一番先であつた。生臭さ坊主。

珊枝郎＝温厚篤実、先代高麗屋を忍ばせる年に一度位は怒るかも知れない。

迷路＝祇園の旦那今では改心、下町の世話は一手に引受る。

虚水＝日本せましとるし歩く、口と手が八丁づつ、医師会の六代目。

弾正＝象の様な可愛いさのある男男之助も交渉の相手にするだろう

捨舟＝禿げた頭を見てると生々庵の兄貴の様でもある。やることを見てゐると幼稚園の子の様でもある。（捨舟）

▼高橋かうたる氏、藤井赤とん坊氏（下関市）は共に下関市商工会理事に当選された▼山崎夢路氏（長崎市）は虹介（にじすけ）と改号▼並木東田楼氏（ホノル、市）は布哇タイムスへ川柳に触れた「ユモーアと人生」を執筆▼庄万よし氏（大阪市）は南区から府議に立候補▼脇田梅子氏（大阪市）は南区から市議に立候補▼片山青蛾氏（愛媛縣）が三月二十日に急逝された、行年二十四才、謹悼▼食満南北氏夫人九十枝さん（兵庫縣）が三月廿一日に神戸の川崎病院で永眠された合掌▼安井ひろし氏が兵庫縣山崎町北魚町の自宅で四月七日に永眠、九日に告別式が執行された。氏は本誌の菊版時代に同人として活躍その後、渡支して文化事業にたづさわつていられたが、戦後中華から引揚げ、郷里山崎で町会議員として町政に盡されていた。

▼正誤＝三月号十七頁六行目「清青」を「青柳」に、四月号二二頁四段三十九行目の「坊ちゃんはあれでも」を「坊ちゃんはあれで」に、廿三頁三段二十三行目の「囲会計」は「囲汁会」に訂正する。

窓口（2）

本社句会で句が抜けたが、「各地柳壇」の句報に載っていなかつた。どういう訳ですかと云う質問があつたので、とりあえず句会で一應説明しておいたが、他にもそうした疑問をもたれている方もあろうと思うので、こゝに重ねてその問題に触れておく。

「各地柳壇」の句は、句会で発表されたものをその儘掲載するのではない。「各地柳壇」は出來るだけ句会の句報を尊重するが、「各地柳壇」は「各地柳壇」の立場から句を採録することにしている。その理由は（一）会のそれ〴〵によつて句のレヴエルが違う。（二）スペースに限りがある。（三）句会での選句は会場内の咄嗟の選句であるのと選者の視野の廣狭等によつて句会外の類句に往々佳吟を発見する場合がある。（四）同一人の句が多数抜けている場合、その作品中の佳吟のみを採録する。これは作品の價値を高めるためとスペースの節約との一石二鳥のねらいから省略するのである。（路）

一品料理と生そば
グリル 芝鶴
上六キヤピトル映画館東三軒目

將軍娘（五）

山路閑古

（五）

その後間もなく侯爵夫人から手紙が届いた。例により美しい筆蹟で、又巧みな文章で綿々と綴られてあつた。

上流婦人の手紙は、女学生などの安手の文章と違つて、何処となく男子に擬ふやうな、力強い筆致がほの見える。この手紙も所謂男まさりの書き様で、云はうとすることが、何の会釈も、飾り氣もなく、剝き出しのまゝ書かれてある。

「期待の通り、君の姿をまのあたり見たうれしさ。彼の駅前で事を下りた時の小妹の氣持を察し給へ。唯興奮に足も地に着かず、こみ上げて來る激情のやり場なく、思はず主人に取り縋つたものです。さうしたはしたない姿を、はからずもお見せすることになりましたが、今思へば、はづかしく後めたく、取り返したいやうな氣が致します。弁解するのではありませんが、小妹は平素あのやうに主人と親しくしてゐるのではありません。」

手紙と実際とは大変違ふやうであつた。彼の時、水のやうにそつけなく、睫毛一本動かすことのなかつた夫人に、どうしてそのやうな激情が宿つてゐたと思はれよう。侯爵に近づいて、何か用事を耳打ちしたばかりの彼の時のことが、果して「こみ上げて來る激情のやり場なく、主人に取り縋つた」と述べられるやうな情熱的の動作であつたであらうか。謂ふところの舞文曲筆とすれば、度を越えた表現であるし、又文章通りの情熱を、人目を憚る上流婦人のたしなみから殺してゐたとすれば、殆ど人間業とは思はれない。何とも判断に苦しむ次第である。

「君の成人した姿を見て、涙が出る程うれしくもあつたが、又物足りないこともありました。思ひ余りし二つばかり、卒直に記すから、非礼の段は御許し下さい。

一つには、君の顔には学問修養の輝きといふものがない事です。教養の高い人はおのづから氣品を具へ、男子としての美しさが顔かたちにあらはれるものです。君は少しも磨かれてゐません。生活の安易さに溺れて、学問修養を捨てゝしまつたのではありませんか。浅ましいことです。学問をなさいませ。修養を捨てゝはなりません。さればとて、学問をして立身出世して貰ひたいとは、小妹は露も思つては居りません。世の中に名利名聞ほど愚かしいものはありません。引き合ひに出すもいかゞなれど、主人などは位三位を辱うし、侯爵、貴族院議員の栄職にあり乍ら、而も日影者同様の身の上です。人が名利名聞に生きられるものならば、小妹がかばかり憂き月日を送らねばならぬいはれが何処にありよせう。

しかし乍ら、学問は必ずしも名利名聞のためのものではありません。学問によつて男子は磨かれ、美しい男が作られるのです。君は小妹のために是非とも美しい男となつて下さい。さうして何時の日か君と語らふ時、君に教へるのではなくて、君に教へられたいのです。小妹は師として君に侍づく他には、最早君との逢瀬はないものとさへ思つてゐます。

先頃フランス在住の従兄から送られた、エドモン・ロスタンのシラノ・ド・ベルジュラックといふ芝居の脚本を読みました。その中に書かれてあるシラノといふ男は、この世のものとも思はれぬ醜い容貌ながら、武勇すぐれ、教養の高い、いとも小氣味よいをのこでした。若し小妹がロクサーヌ姫であるならば、このシラノをこそ恋ひ慕うたことでありませう。」

この一段はまさに私の欠点に触れたものであつた。前にも述べた通り、私は縣の判任属として頗る得意の時代であつた。さうした小役人タイプが風姿容貌の上にもあらはれてゐたことは否めないのである。学問も満更捨てた訳でもなく、講義録などによつて、頻りに勉強はして居つたのであるが、それがどういふ目的のものでもなかつた。いかに学問したところで、もうこの上の出世は覚束かなかつたからである。今学問が男を美しくするといふことを知つて、始めて心を打たれるものがあつた。いかにも、男子は化粧を以つて装はれるものではない。学問こそ男子の化粧ではあるまいかと。

「二つには、君の身辺を観察して、君には明らかに偏食の傾向のあるのが認められたことです。偏食は無知、不摂生のあらはれ故、是非とも矯正して下さい。

当邸にには石塚左玄といふ医者が古くから出入りして居り、小妹もこれを相談相手として、主人のため食養生の研究など致して居ります。石塚の話によると、偏食者は下駄の減り方で知れるといふことですが、君の下駄は男子に似合はず内輪に減つてゐました。これは塩分の足りない証拠で、やがては不健康に陥ります。下駄の減り方が正常になるまで、つとめて塩辛いものを摂取して下さい。学問をするのには、先づ身体の健康が第一と思ひます。」

これには驚かされるものがあつた。私が果して偏食かどうか、殊に塩分が足りないなどゝいふことは、俄かに納得出來ないことであつたが、下駄が内輪に減るといふことは、確かに私の性來の癖であつた。男子は大抵は外輪に下駄が減るもので、内輪に下駄を減らすものは、十人に一人位しかない。下駄と云はず、靴と云はず、忽ち内輪に減ら

してしまふのが私の穿き癖で、何とも矯正しようのないものであつた。下駄は左右取替へて穿けばよいと云はれてゐるが、たとへさうして穿いても、それが無意識の中にいつか勝手に穿き替へられてゐるのである。

あの咽嗟の場合に、顔に学問の輝きのないこと、下駄の内輪に減ることなど、頭の先から足の下まで、誤まらず観察を下してゐるといふのは、まことに驚くべき炯眼ではあるまいか。逢ひたい、見たいと常日頃から心構へしてゐるのでなければ、到底なし得ないことである。これから思ふと、夫人の手紙は必ずしも舞文曲筆ではなく、眞実をこめ、眞情を吐露して書かれたものに違ひないのである。

思ふに夫人は対象物を仮定して、それに恋してゐるのであらう。その恋は眞率であるとしても、私とは何の関はるところもない。私はたま〳〵その対象物に仮定されたまでのことで、夫人は私そのものを慕つてゐるのではないのである——と、私は強ひてそのやうに解釈したのであつた。

暫くたつと又手紙が來た。今度は消印が東京ではなくて、北陸の或町の局名となつてゐた。かねての話の通り、いよ〳〵北陸の旧藩に隠退されたことが、その消印からも想像されるのだつた。

果して手紙には、侯爵と共に旧藩の本邸に移られたことが記され、宏壮な邸内の様子や、変つた日常生活のことなどが委しく記されてゐた。

「主人は邸内に物産館を作る計画を持つてゐます。物産館には、五畿八道八十五國に因みある品物を集めることになつて居り、品物も大方各地から届いてゐますが、生憎と小妹には思ひ出の深い静岡の、駿河國からはまだ一品も届いて居りません。品物は何品にあれ、すべて國名を冠して呼はれてゐるその土地の物産で、由緒の古い、特色のあるものが選ばれます。さう云へば駿河の名産は何てせうか。有名な興津鯛も、茶も蒔絵も、駿河の國名を冠して呼ばれてはゐないやうです。君はその土地に住む人故、又よい思ひつきもありませう。若し一品なりとも主人宛に送つて下されば、主人も小妹もどんなに満足することでせう。

あらゆる機会をとらへて、君に文を通はせたがつてゐる、恋情のいたづらものが、右のやうな愚かな注文をさせたものと思つて下さい。品物は敢てほしいのではなく、君に文を書く機会が、小妹にとつてはむしろ千金にも替へ難いのでした。さるにても契りの糸はその品に掛るかのやう、儚ない恋の片便り故に、今はその品のみ待ち焦れて居ります。」

これまで興にまかせ、筆にまかせて書き綴られた手紙は、その書くことで満足されてゐるかのやうに、どれ一つとして返事を求めてゐるものはなかつた。返事をよこされることは迷惑であつたかも知れないし、又返事を書きたくても、文才のない私には到底その勇氣とてもないのであつた。従つていつも手紙は貰放しになつてゐたが、今度は少くも品物だけは送らなくてはならない。しかもそれが、こちらの趣味教養をはかる、メンタルテストのやうにも思はれるのだつた。

駿河國には、別にその國名を以つて呼ばれてゐるやうな名産もないが、強ひてあげれば駿河半紙であらう。それも和紙として特色あるものではなく、雑用に使はれる漉き返しの類ひに過ぎない。

半紙よりは稍々小形で、普通の漉き返しよりは一廻り大きく、色も黒すんで、極めて下品な和紙である。一帖毎に太い藁しべが挿んであり、そのため紙面に凸凹の跡が出來てゐるなど、田舎臭いげてものである。昔からある駿河紙は美濃紙や土佐紙と同じやうに雁皮を材料とした上質の和紙であつたと云はれているが、今の品は、監獄などで囚人が漉いてゐる粗悪な再製品で、一〆めの包装紙の上に、駿河半紙と麗々しく商標が貼られてゐるのさへ、むしろその紙として恥づかしいやうなものであつた。

私はその商標が氣に入つたので、まるでメンタルテストにかち得たやう、得々として駿河半紙の一〆めを小包便で北陸へ送つた。

すると折返し直ぐ礼状が届いた。例によつて長々と、それが詮衡を徑て物産館に納められたいきさつが記され、又その礼心か侯爵が自ら写したといふ写眞が数枚手紙の中に挿まれてあつた。写眞には物産館始め、邸内の豪奢な建物のみ写され、記念写眞に有りさうな人物の姿は一つも出てゐない。侯爵も侯爵夫人も写眞は滅多に坊間に出されないことになつてゐる爲であらう。

手紙の最後には、次のやうなことが認めてあつた。

「駿河から連れて來てゐる女中の話によると、駿河には婚礼多産の祝儀として、この紙を贈る風習がある由、これによつて君の思ひ遣りも略々察することが出來ました。吾々夫婦が田舎の健康地に移つたのも、御明察のやうな理由があつたからです。夫婦の間には多年子供がありませんので、当家には早く養子を迎へる議もあり、一方にはそれを無川といふ者もあつて、旧臣二派に分れ、確執にも及び兼ねない有様でした。

これと申すのは、もと〳〵小妹が当家に輿入れした当時、自ら申すも恥づかしけれど、大樹將軍の娘として幼時から賢明を謳はれ、その種を移して、子孫の後栄を計らうとする先代侯爵の宿題によつて婚儀が行はれたのです。今更先代の宿願を妄りになし難いとて、最近養子説は却けられ、吾々夫婦の郷里移轉となつたものです。所が変れば子供も生まれようといふ。今はそれが家臣一統の念願ともなつてゐます。君がそのことを察して、駿河國の風習によつて、それとなく吾々夫婦の帰郷を祝つて下さつたことは、シラノも及はざる明知の致すところと思ひます。しかし、小妹の氣持は全く違ひます。唯々君のさかしらが憎まれてなりません。

鶴は一目見て身籠ると云ひ傳へてゐます。あゝこの身が鶴であるならば、彼の時若しやと思ひ寄ることもありましたらう。それも空しい迷信と御嗤ひになりますか、君の贈物は今更に御返しするすべもありませんが、さりとては紙よりも薄い君の情が歎かれてなりません。何のために先代や家臣の期待に反いてまで、この身は今日まで清らかにあり得たのでせうか。御察し下さひませ。せつは君のものなのです。」

私はこゝに於いて思はず涙を落した。自己の不明を恥ぢると共に、この恋を把へなくては男ではあるまいと云ふ氣がした。今更学問も遅蒔ではあつたが、文字通り三十近くして、憤然男子の志を立てたのであつた。（未完）

いのちある句を創れ

花地抛壇

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

三月例會（本社）

三月三日　午後六時　於大宝文化会館

櫻にはまだ早い春宵を暮れきらぬうちから出席の面々で会場の椅子がふさがれた。出雲市の小倉へとち氏が出席された。水谷鮎美氏の句評は稍々越を替へ主として各支部の句報から抜擢された。南支部の葉光、北支部の博也、夕刊山陽新聞読者川柳大会の富至、竹原支部の芳泉、呉支部の甦光、弓削支部の弓創平、備前支部の久米雄、大牟田支部の抱逸、姫路支部の一笑、新春木社大会の香林、山焼川柳大会の千舟の諸氏の句を抜撰短評を加へられた。路郎師の柳話は例によつて熱弁をふるはれた。席題・兼題の披講後不朽洞賞カップは荒木哲水氏の手に落ちた。ベストテンに賞品授與の後九時半閉会。

出席者＝路郎・三司・沒食子・天貧・芳人・豆秋・喜久堂・烏荘・紫香・正司・三平・常夜灯・末吉・翠光・白香・清子・香林・よかろ・永山・愛論・博也・一杉・貴山・てるを・哲水・一平・三波子・俊作・鮎美・牛歩・夢裡・梅里・柳亭・扇子仙・生々庵・妄夢・秀雄・春柳・古方・へとち・栞・淡舟・史葉・亞鈍・野介・晴峯・小松園・花村・恒明・いわを・義英・梨里

兼題「新刊」　麻生　路郎選

新刊が故人の前に飾られる　美　英
新刊を手に療養の友を訪ひ　春　巣
新刊のもう仙花紙でない定價　七面山
妻が買いたい新刊速成洋裁書　鉄　兒
新刊へ陽が傾いたサンルーム　博　也
新刊へバリリナイフの音もよし　俊　作
新刊を読み切る氣なり午前二時　愛　論
千円もするので医書が万引かれ　一　杉
新刊の値段にもとの棚へ載せ　三　平
新刊も一冊入れた旅カバン　愛　論
アルバイト新刊辞書がやつと買へ　芳　人
新刊に社運をかけて祈るのみ　恒　明
セロハンの音して新刊開かれる　紫　香
新刊に恩師の写眞笑みてあり　生々庵
新刊へ手がとどかないさけたぼ　豆　秋
新刊も読んでますわと女給さん　花　村
賣りとばす氣で新刊を読んでいる　豆　秋
新刊からもうアイデアを盗んでる　瓜　平
新刊のささめゆき買う細い雪　扇子仙
論敵にも贈呈しとく新刊書　亞　鈍

兼題「乘越し」　高鷲　亞鈍選

あきらめた顔で乘越席につき　香　林
乘越して親類のはしくれ思ひ出し　栞
悪友に出会ひ乘越するときめ　正　司
終電車乘こしそうな顔ばかり　花　村
乘越して北風さむい駅へ降り　豆　秋
乘越しが宿屋無いかと酔うている　貴　山
乘り越した同志ホームで煙草の火　生々庵
檢札の声に乘越しあわて出し　天　貧
乘越しなやと終電へのせてくれ　鉄　兒
朗らかに乘越してゐる祝酒　よかろ
乘越しの窓は町から村になり　恒　明
乘越しの帰り初発に追ひぬかれ　野　介
乘越をした瞳他人の眼と出合い　一　平
橋わたる音で乘越し氣付くなり　紫　香
乘越しの客へ邪険に水をまき　美　秋
乘越しの改札口にある理性　春　柳
まいて来た同僚と会ふストリップ　梅　里
同僚の涙も受けるコップ酒　永　山
同僚に課長のくせを聞いておく　淡　舟
勤続三十年同僚として三十年　生々庵
諦めてしまへと同僚あつけなし　三　司
同僚は何んにも云わず泣いてくれ　香　林
ドヤ〳〵と同僚が来た新家庭　常夜灯
同僚の見合え服も靴も貸し　鉄　兒
同僚へかくす電話が又かゝり　葉　光
同僚が何にも言はずに手を握り　十九平
高塀に住み同僚を敬遠し　牛　歩
同僚の法螺にうつかり引つかゝり　春　巣
同僚のよしみと云ふがあくびする　夢　裡
同僚の見舞ひ手ぶらで来てうれし　紫　香

席題「第六感」　村松　夢裡選

第六感下車見逃がさぬ私服也　へとち
第六感刑事二三歩やりすごし　哲　水
ほめられて第六感がありました　栞
第六感犬じいわりと腰を上げ　俊　作
六感に来たがと後の負惜しみ　沒食子
六感へ泣きくづれたる電話口　博　也
集金の第六感は判を持ち　小松園
靴音が第六感をゼロにする　貴　山
第六感の影見失う花の山　恒　明
六感は淋し左遷を知つた朝　史　葉
第六感はたらく程の年でなく　花　村
第六感粋をきかせてれさせる　愛　論
第六感冷たく記者のペン走る　扇子仙
第六感そしらぬ顔で聞いている　俊　作
第六感女將さつさと片づける　いわを
ピンと来た第六感へ停車する　梅　里
借りに来たな先きに泣いてやろ　翠　光
六感が心の窓を固く閉ぢ　鮎　美
第六感ちと割切れぬ窓をあけ　野　介

席題「旅愁」　阿形　一杉選

パイヤーに和食旅愁を深くさせ　へとち
躓ついたことも旅先氣にかゝり　小松園
丼前を着ればふわりと来る旅愁　野　介
旅愁どころかやれ〳〵宿に酒を酌み　生々庵
シグナルの青さが旅愁かきたてる　翠　光
花嫁はさびしい雲をみつけたり　妄　夢
旅の朝鏡に白髪ふと見つけ　花　村
大阪のどまんなかに海女病んでいる　鮎　美
旅愁ふと鼻の先をばかすめたり　野　介
戰いのない日の旅愁川靜か　扇子仙
女たど旅愁か汽車の窓をふく　晴　峯
旅愁々々壁画の像が妻に似る　哲　水

席題「醜聞」　新川　博也選

スキヤンダル折角の縁わやになり　白　香
醜聞をやはり氣にしてゐる社長　柳　亭
先生の醜聞生徒先に知り　てるを
醜聞を聞きたがる娘の素行ぶり　末　吉
スキヤンダル里から母も来るさわぎ　恒　明
醜聞を熱海の宿で尋ねられ　淡　舟
醜聞になるさは知らず今日も逢い　扇子仙
醜聞を二号三号にも知られ　豆　秋
泰次郎胸で醜聞書きこなし　烏　荘
醜聞を閑秀作家否定せず　正　司
醜聞をかけ出し記者が素破抜き　沒食子
醜聞の眞上燕の巣が温し　鮎　美
醜聞に思はぬ人の愚痴をきく　夢　裡
醜聞を恥ぢて女房は里へ去に　喜久堂
醜聞を否定しながら燭に立ち　沒食子

席題「夜霧」　福田　妄夢選

チヤルメラは夜霧の中で汗を拭き　三波子
ドブ板を夜霧の中で踏み外し　瓜　平
確証を握り夜霧を突走る　いわを
ゴシツプの二人夜霧に消えてゆき　淡　舟
これきりの浮世を包む夜霧の灯　鮎　美
貞操は別な世界にある夜霧　史　葉

席題「おつちよこちよい」　菊沢小松園選

写眞ではおつちよこちよいに見えねなり　三　平
おつちよこちよい同士出逢つた戎橋　俊　作
オツチヨコチヨイ案外店で役にたち　亞　鈍
おつちよこちよい返事きかずにさようなら　一　平

おつちよこちよいその正直が買われたり　香林
ご自分はおつちよこちよいでないつもり　生々庵
おつちよこちよいも社長の三号知らなんだ　野介
おつちよこちよいだが所長にはお氣に入り　烏莊
おつちよこちよい無なくてならない役があり　へとち
おつちよこちよい今度は資本家側につき　哲水
おつちよこちよい何にもない日は肩がこり　同
おつちよこちよいさてさなつたらものいわや　古方

山燒川柳大會(3)(奈良縣)

兼題「釣鐘」　中島生々庵選

釣鐘の余韻の中に街は暮れ　葉留路
鐘の音大佛殿の上を行く　七日
新調の釣鐘指ではじかれる　瓜平
鐘の音一人の旅をたのしませ　万滴
初詣釣鐘一つついて來る　竹莊
世につれて鐘撞料も上るなり　豆秋
つりがねの音にもなれて奈良の鹿　一歩
ステッキが鐘の由緒を語つてる　瓜平
今生の思ひ出老母も一つ撞き　月南
釣鐘へあつらへ向きに花が散り　水客
釣鐘の歴史にふれた音をきく　成行
ジエスチヤの程も釣鐘鳴り出さず　旅風
住み馴れて明日の天氣を鐘で知り　葉光
鐘の音奈良むらさきに暮れる山　信二
釣鐘の緣起目出度き東大寺　伸生
釣鐘の銘に日本も古びたり　葉平
孫の手に釣鐘が鳴る奈良の春　由布
青春は鐘ついてやゝ胸がはれ　花王
釣鐘の余韻を近く畫にする　敏夫
バイヤーの妻にもつかす奈良の鐘　九葉
子が撞いたらしい余韻となつて消え　都三
釣鐘のある風景へ僧一人　不二
釣鐘の音色へ鹿も春を知り　五・名作の裏へ見学廻つてみ　水客
釣鐘の下でもめてる國訛り　五・モナリザを見つめ哲学書をかゝえ　凡々
順々に旅の想ひ出鐘を撞き　路三　五・名作に母の匂ひのクレヨン画　凡茶
鐘の音にまだ煩悩が断ちきれず　酔歩人　地・名作と云はん吾子にある響　つとむ
科学する心釣鐘取り卷かれ　迷宮　天・名作のかげに女のある話　蘭華
秋　翠軸・名作を原書で読んで退屈し　春巢

五・天平の夢捲き返せ鐘を撞き　一歩
五・釣鐘の由來を聞けば得意がり　文蝶
五・性格の通り釣鐘音を出し　ひろし
五・旅愁ふと鐘の余韻につき当り　卜占
五・釣鐘へ僧青春をぶつつける　修三
人・釣鐘をつく氣トンビの袖をはれ　青丹子
地・つけそうもない釣鐘そつとなで　ふじ彌
天・釣鐘の余韻と共に坂を降り　白柳子

席題「名作」　北川　春巢選

秘佛公園成程と云ふ鑒の跡　万滴
名作を集めたアルの趣味を賞め　貴山
置くとこに置いて名作らしう見え　翠光
名作にモデルあり我に似た話　成行
僕にでも画けそうピカソの顔ゆがみ　哲水
名作に思はず息をつめて立ち　成行
名作のきづを見付けた眼が据はり　小松園
名作があたら土藏の中に朽ち　十九平
名作の成程眞似の出來ぬとこ　笛生
判らないまま運慶を讃めておき　豆秋
先代の顔で名作選に入り　夢裡
一刀三礼仕上の刀を研ぎ終へる　古方
漓顧の日へ名作が出來上り　銀々
名作へ博物館の灯がくらし　ふじ彌
名作を映画駄作にしてしまい　眉水
名作の使はぬ太刀となりにけり　小松園
説明を聞いて名作見直され　夢裡
名作を干して万平青のたどまし　鮎美
惚れぼれと見る天平の腰線美　修三
名作の原稿雜誌へちよんぎられ　正治
名作を賞めるは日本語にあらず　喜山
翠光
軸・案内人ありがたそうな声を出し　豆秋

当夜雜感　竹田　芦穂選

ひとときの寒さ忘れて山燒ける　笛生
仲麿呂を偲びて三笠暮れかゝり　香林
大杉へ川柳花火引かかり　貴山
燒酎でよいと若草山の下　同

兼題「案内人」　須崎　豆秋選

生徒もう案内人の癖を眞似　葉留路
案内は昔むかしの歌も詠み　伸生
大佛の鼻を案内人見伸き　白眼子
案内人御賽銭迄上げて見せ　夢裡
案内人ただの夫婦でないを知り　千舟
案内人元信描く声になり　若菜
案内人古びた井戸を覗かせる　葉平
年寄へ案内の口早すぎる　仙居
案内入嘘も少々折込んで　愛論
いつからか小腰になれた案内人　ひろし
腹かけから煙管を出して案内人　青丹子
記念写眞へ案内人も写される　同
説明の顔面白い三月堂　修三
さくらちらゝ案内人もちと酔うて　万滴
案内人少し英語もまぜて云ひ　晴峯
近道を案内人が先にたち　旅風
案内人さては四國だなと思ひ　白柳子
天平に生きてた様に説明し　晴峯
案内人に生徒の様について行く　十九平
案内人税務署員とは知らず　哲水
氣に入つたところで案内人はずみ　凡々
大佛へ來て案内の名調子　正則
五・大佛へ來て案内の弁がさえ　薺花
五・案内人むづかしいこと知りまへん　芦穂
五・案内をかれて人力はかどらず　竹莊
五・釣鐘を案内人はついて見せ　金鹿
五・案内人明日の天氣の雲を見る　迷宮
人・案内人だけが離れて飯を喰べ　正貴
地・案内人聞いて居ようが居るまひが　翠光
天・古都の雨案内人も濡れたまま　つとむ
軸・案内人ありがたそうな声を出し　豆秋

花火待つ間に好きな曲も鳴り　正則
忌部花火見て溜飲がちと下り　十九平
一番星みつけた山燒まつてゐる　古方
もう花火初まる氣配くれかゝり　修三
三笠山すべて降して花火散る　正則
迷子が招待席でもてなされ　十九平
成人を壽ぐように山が燒け　和笛
山燒の日の若草山はつぶれそう　翠光
数万の顔仰向けて山は燒け　同
山燒へ子を連れて來た指の汗　万滴
山燒の古都紫に黄昏れる　修三
ちゝくまの子が山燒の前に立ち　古方
川柳花火数万人へパツと割れ　春巢
この人出若草山を低くう見せ　生々庵
つり花火追うてみつけたお月様　古方

川雜　大阪南支部句會(大阪市)

三月十四日　於阿倍王子神社

片便り・一瞬・折詰・屑・魔法・造花・一足違ひ

片便り学資届いたとも云はず　娯句樂
薄情な娘にせず焦れた片だより　勢火
片便り異國の空に涙ぐみ　照夫
片だより愛してならぬ人を恋ひ　葉光
片だより言ひたいことを云ふてくる　妄夢
愛情を信じ切つての片だより　愛論
片だより先は御無事ときめておき　無人
不時着になつたを知らぬ片だより　小松園

版写謄田阪

大阪市北区芝田町二五

株式会社　阪田商会

電話　福島五六三一番
五九九五番
一四番

矢のやうな催促依然片だより　梅里
片だより嫁の鋏補者連れて来る　芦穂
溜息も春の宵なり片だより　沐天
片だよりもうアパートにいないのか　一杉
あんなにも泣いて別れて片だより　苑女
許してとだけで居所書いてない　天貧
その意志を依然替えない片便り　貴山
郵便局の手落失恋してしまい　路郎
片だより鼻をかまれているのなり　同
抽籤の一瞬百万円の夢が消え　天貧
飛乗りの一瞬母の顔うかぶ　淡舟
スナップは片足上げたとこで撮れ　酔歩
一瞬の視線に愛を信じ合い　貞女
一瞬の花火が消えた星月夜　雷丹子
その一瞬あゝ逆轉の三壘打　万滴
一瞬の氣轉一生感謝され　小松園
一瞬の視線若さが動き初め　芦穂
巫女の瞳に一瞬神の怒り見ゆ　鮎美
フラッシュへ首相の瞳つれのま　古方
一瞬を理性あやふく踏みとゞめ　梅里
北渓のその一瞬へ男賭け　亜鈍
手應への一瞬竿をぐつと持ち　愛論
折詰も無事で帰つた梯子酒　天貧
折詰へ寝巻のまゝで起きて来る　葉光
折詰は家の土産と決めて呑み　いわを
折詰も型だけ内輪丈けの式　正則
折詰が足らず幹事を慌てさせ　恒明
折詰だけは忘れず座敷ぬけて来る　雷丹子
折詰の機嫌取り巻く子沢山　小松園
折詰の鯛はいつすん縮こまり　野介
折詰をあんぢよ女給にかれたり　豆秋
まつすぐに帰れと折を提げさせ　默平
喰べ残し仲居世帯氣出して詰め　同
折詰を母に渡して茶を入れる　淡舟
折詰を待ちくたびれて寝てしまい　同
花吹雪折も開いて佐渡おけさ　晴峯
折詰が吠えられてゐる午前二時　野介
二次会へ来て折詰は空にされ　梅里
屑拾ひ一寸蹴みたい手紙が出　無人
高く買う屑やへ母は茶など汲み　默平
かんな屑だけは一人前に出し　妄夢
思ひきや子屑といふた子にかゝる　一杉
ポケツから出るはタバコの屑ばかり　晴峯
慶びは近し日向の鉋屑　鮎美
地下足袋に日傭らしい鉋屑　梅里
屑拾ふ人に知性の瞳みる　酔歩
糸屑を拾い集めた夜の冷え　勢火
屑もあるならん兎も角育てた子　芦穂
文士たらんとして紙屑の多き日々　淡舟
住宅難魔法使いは森に住み　英美子
魔法造ごうにもならぬ腹がへり　默平
金づまり魔法も知らず苦にもせず　晴峯
恋をした魔法使は杖を捨て　正司
魔法とく小槌にふれる姫の指　古方
キャバレーは造花ちんさん客を寄せ　照夫
新店に贈る造花が景氣付け　天貧
クリスマスすめば造花屋櫻咲き　酔歩
開店の造花へ女將派手にいる　勢火
ポンポリを燈し造花は酔ふている　いわを
ラストシーン造花チラ〳〵散ってくれ　正則
らんまんと紙のさくらが咲く踊り　豆秋
美くしい嘘を造花の下で聞く　小松園
造花でもやつぱり酔へる酒があり　無人
ポンポンと値切る景氣に造花搖れ　春夢草
ステップの乱れて造花火ともゆる　野介
駅に咲く造花が春を招んでいる　亜鈍
もう春のモード造花の櫻咲く　正司
色あせた造花この店左前　同
草臥れて造花の埃見るホーム　芦穂
手間賃をきけば造花の灯が寒い　同
三分咲きとうに造花の花のあせ　正則
開店の造花に路はせばまれて　いわを
慶弔の造花を同じ手で造り　英美子
チチキトク一足違の母の愚痴　春峰
一足違い好意も溝となつていた　貞女
幸運と一足違ひばかりにて　豆秋
一足の違い悲劇の主となり　芦穂
一足の違い終世下積みか　無人
賣れていた一足違北南　一杉
雨傘をおろしたとこへ帰つて来　古方
一足違あわれ此の世の人でなし　春柳
一足違ひ別の且邦がおとづれる　晴峯
新記録一足違ひだけのこと　葉光
一足違ひがこんな女にしてしもた　恒明
籠抜けの灰皿に煙草まだけぶり　鮎美
一足違ひあゝ儚さは人生か　沐天

雑川　**ウイロー社句會**（布哇）

シヤツピングだけで氣もすむ夜の町　拜山
灯が点いて見るとホノルル長い町　一牛
月給日埃を吸ひに町に出る　雅一
老らくの恋下町に用が増え　紅宿
サンダルの脚線町に春は来た　笑有
町となり市となり税が増えて行き　純香
田舎町スターまがひの名前で来　同
会葬列町のラヂオはジヤヅが鳴り　大彦
愛人のバウハナを待つ町は込み　泉水
註・バウハナはハワイ語で仕事終りの意
けちんぼう町の有志を敬遠し　柳子
斗病の眼に町の灯は明るすぎ　快夢起
希望なき町に洋蘭などいぢり　野渉
俺だけが憐に見える町の灯よ　暁舟
店先きで町の鼓動を打診する　我樂多
この町でもてた話は二昔　魔花麗

雑川　**北大阪支部句會**（大阪市）

二月十九日　於梅田正法寺
黒川　紫香報

がしんたれ・寝息・並ぶ・寒行・
焼芋

あつさりとふられてしもたがしんたれ　博也
停年でまだ平でゐるガシンタレ　紫香
朝の陽に寝息まだ〳〵本調子　春柳
船旅の寝息静かな波となり　紫香
灯を消せば寝息ばかりの子沢山　鮎美
すや〳〵と寝て看護婦と代るなり　香林
並んでる問屋同志にある敵意　古方
記念写眞へ亡妻と並んだ日が恋し　雷丹子
幼稚園上手に並ぶだけで晝　哲水
並ぶ子の頭押えて数をよみ　聖山
後家さんは寒行に出て氣がまぎれ　香林

小児科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁渓側
電話南㊱三二四六

寒行も先達としての節まわし　古方
寒行へ隣の犬が吠えたてる　香林
負けぬ氣の顔が並んだ寒太鼓　若菜
焼跡へ出て寒行はひき返し　豆秋
寒行がガヤ〳〵露路を出かけたり　若菜
寒行のなかに会いたくない一人　水客
寒行へ娘だまつたまゝつゞき　万滴
寒行へ母は佛間に灯を入れる　博也
おしやべりの中へ焼芋拡げに来　紫香
焼芋を買う間に鼻をかんでやり　哲水

雑川　**大牟田支部句會**（大牟田市）

二月二十日　於三染人事課
富田　一葉報

日当り・外面・姪娘・利子

全快も間近許しの日向ぼこ　扇波
オフイスの疲れは日向ぼこに来る　同
日曜を日向ぼつこの金詰り　正美
あんな事する人でない記事を読み　一葉
男装の麗人にして子を孕み　鶴堂
懐姙の知らせに生衣もう届き　抱逸
利子だけを入れて月末ほつとする　同

雑川　**竹原支部句會**（廣島縣）

三月十日　於福岡葉留路屋
黒本　芳泉報

ＳＯＳ・難題・波紋・料理

ＳＯＳ救助船はブイを積み　浮城
ＳＯＳキャッチされたか氣がもめる　和朗
サラリーへＳＯＳの日が続き　葉留路

三丈で足りぬ女の愚痴を聞く　芳泉
難題が解けて一ぶくすひつける　富穂
水葬の波紋名残りのつきぬなり　芳郎
映画では身投波紋で知らすだけ　和朗
手料理の自慢へ友を呼んで來る　葉留路
手料理と云ふお代りをすゝめられ　芳泉
色男料理はみんな女食ひ　紫水
料理場をのぞいて急かす知った人　あきら

雑川　**岡山支部句會**（岡山縣）
二月二十四日　於 弘済会ハウス
藤本　澗年報

白壁・散髪・年ごろ・振り返へる・座敷・ネクタイ・見舞

白壁が昔をしのぶだけとなり　格一
迷彩とともに白壁落ちかかり　風來子
理髪屋で襟の汚れが氣にかゝり　正一
散髪がすめば乳房を離される　迷窓
禿げてゐるのへ散髪屋櫛を当て　聰夢
出戻りがあつて散髪二人待ち　鉄人
剃刀が心配されるほど喋り　鉄兒
散髪屋痒ゆくないとこはかり掻き　九坡
搾り出すように理髪屋顎を剃り　十九平
散髪へ行くのに髪へ櫛を入れ　美能留
年ごろを扱いかねる父の額　茶々
年ごろの娘税金ほどこたえ　高良
振り返へるわが青春は海ばかり　作州
御主人が出て來て座敷堅くなり　三葉
外交のうまさ座敷へ上り込み　風來子
おいらの恋ネクタイを派出にしめ　火峯
ネクタイの哀れ寝巻の紐となる　澗年
ネクタイを少しゆるめた良い氣嫌　四案
上役の見舞病人疲れ果て　九坡
火事見舞本当は廣告ほしいなり　忠美
つき添いが氣をきかしてる見舞客　茶々
お見舞に行きそこなつた計報きく　同

雑川　**吳支部句會**（吳市）
二月十二日　於 林野　甦光居

手違い・外套・玄関・八

手違いと知らず一人はバスに乗り　甦光
手違いの責任感を遺書に見る　芳泉
外套を子に貸す夜の帰り道　四季無
外套の色も眞似てるヅカフアン　基之
外套を総ざらえさす無い切符　瞳
よれ〳〵の外套赤い羽根をつけ　紅兒
デカンショが又外套を忘れさせ　九晃
外套の古さ悔なき停年期　秀峰
新調のダブル外套は手に持つて　哲也
終電を待つ外套は衿を立て　基之
玄関が眞暗がりの門構え　彩峰
玄関に声無しあきす考へる　春江
押賣の眼に玄関の下駄の数　基之
玄関のベルはいたづらされたゞけ　梅香
玄関でためらつて居る朝帰り　音柳
押賣りと知らず玄関かしこまり　蔦峰
玄関ですき焼と知る子の笑顔　しづを
電蓄の切れ目を玄関から呼ばれ　高馬
玄関を今日は目出度い下駄で埋め　十進
八ツ当り女中はつらい者と知る　四季無
八十と思へぬ針の手が動き　甦光

雑川　**篠山支部句会**（兵庫縣）
二月二十七日　於 配電局寮
小西　無鬼報

最後・二日酔・出発

最後かと見た王將のうまく逃げ　ひかる
胸算用してから最後の駅で買い　指月
かけぶとんだけで寝てゐる二日酔　汲流
二日酔しまいに蚊帳にくるめられ　斉花
女房へ今日は負けとく宿酔　無鬼
出発に準備して居た声明書　初夫
出発の激励の辞声ふるえ　残玉
母親も駅まで送る鹿島立ち　無聖
見送ってからの涙は後ろむき　無鬼
再出発の日本今度は手をひかれ　同

雑川　**弓削支部句會**（岡山縣）
三月三日　於 弓削小学校

開館・ラブレター・知らぬ振り・腕だめし・梅・地図・出勤

開館の花輪えボスの名が並び　笑泉
開館の窓こと〴〵く開け放ち　朗笑
公職の手前苦しき目をつむり　花子
右側通行ポリスの声を聞き流し　鉄兒
陸口を云うた相手へ笑いかけ　牛歩
ラブレター私のるすのまに届き　久米女
ラブレター仮名もありラブレター　七面山
不足料氣軽に拂うラブレター　大平樂
ラブレター辞書を頼りに書き連れ　七面山
兄妹の様につきあいたい返事　弓削平
核心にふれすきれいなラブレター　鉄兒
秘書だけが知つてる社長のラブレター　一貫
梅一輪咲いたと家中庭に出る　忠美
凛として生き抜く姿梅に似て　しげ女
魅けて咲く梅の香に足を止め　鳴子
屋敷跡一本きりの梅が咲き　竹風
紅梅の見頃茶室を開く沙汰　花子
梅見客とりはだたてゝ酒をくみ　丸太
腕だめし大人ぢないと逃げを打ち　びか一
腕だめしどうか神様佛様　大平樂
腕だめしのるかそるかの金を借り　久米女
腕だめしちと早すぎた本舞台　しげ女
腕だめし施療患者え手術する　十九平
腕だめしちと物足らぬ相手なり　一貫
定刻に社長がやつて来た驚き　弓削平
不氣嫌な社長お早ようも云わず　百郎
出勤へ晩のおかずをたのまれる　鉄兒
出勤はしたが新聞読んだゞけ　十九平
子煩脳出勤時間忘れてゐ　一貫
道問えば大地に書いてくれた地図　百郎
地図にないさと逃うたハイキング　笑泉
先頭が地図を見ていて小休止　弓削平

二月六日　於 弓削小学校
福島　鉄兒報

乱暴・外出・うつかり・精農・軽・真・出たらめ

断れば戸も乱暴に閉めて去に　十九平
うつかりとあだ名が先に出てもまい　麦秋
うつかりと不在の主が声を挙げ　野人
花嫁の外出噂を背で受け　瓢々
外出の夫へ子供つけて出し　麦秋
外出の妻水加減云い残し　鉄兒
外出へさえずる様な化粧部屋　忠美
行先は黒板と違う社長さん　水甫
精農の英氣養う寝正月　不老
精農の留守居は莚うつて居り　弓削平
精農の不肖の子です運轉手　久米女
精農の愛に應える田の実り　夢成
精農の後は継がないアプレ亜　笑泉
精農の根氣へ牛も敗けてゐる　瓢々
星明り精農の牛野に動く　茶々
精農の妻もパーマで畑へ出　瓢々
精農の灯一つ消え残る　夢成
精農の予算農具を先に立て　中山子
軽蔑をされたと誤解して帰り　裕泉
戦後派は純潔居士を軽蔑し　華山
出たらめが抜きさしならぬ破目となり　畝女
あの固い約束出たらめは知らず　竹風
出たらめの踊を酔うた頃に出し

東京そばと
灘一とすじ
大阪の新宿
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店
大萬
大阪日日新聞の「味覚推薦」から轉載——
灘の生一本を飲みたがつていられる左党におすゝめしたい店、アベノ橋・近畿映画地下食道街の「大万」というおでん屋、こんな店にこんないゝ酒がと思った。二本も飲めば充分〃いらっしやいませ〃とハデにどなられて思はず〃ハイ今晩は〃……（十郎・雁玉）

大晦日もう出たらめも云うとれず　一貫
出たらめな申告出たらあな頭でくる　不道
出たらめが思はぬ方へ飛火する　しげ女
出たらめが一生かけた恋となり　遊子
ばれそうになつて出たらめ筋をかえ　潤年
出たらめがすら〳〵云えてパーになれ　悠貴女
出たらめの節父ちやんの流行歌　牛歩

川雑　**岡山縣廳支部句會**（岡山縣）
三月三日　於縣廳内世話課寮
服部十九平報

来屋・ランチ・食道樂・移轉・朝寝・履歴書

百姓の苦労に来屋ちよつとふれ　三葉
来屋まだ役所の褌が抜けきらず　潤年
統制の中へもみ手の来屋出來　玲花
掃き寄せを生かして来屋鶏を飼ひ　十九平
うちの鶏と来屋の鶏が歩いてる　中山子
チツブもうランチの客へ当にせず　十九平
お上りのランチホークは右に持ち　格一
家族連れランチの單價掛けてみる　四案
見物の母はランチもとつてみる　茶々
陳列のランチはこんな色でなし　四案
デパートのランチですます家族連れ　潤年
食道樂のつもりいかものあまり食い　紫郎
食道樂塩の加減にちよつと触れ　中山子
食道樂の支那語女將をまごつかせ　風來子
食道樂へ女將話を合はせとき　七面山
愛犬も移轉荷物の数に入り　茶々
移轉地図目あてにされる電車道　風流子
移轉先知られたくない先があり　びか一
移轉してくれば商人抜け目なく　茶々
陽溜りを追つてまこと場所を替へ　紫郎
附箋付け移轉先まで督促狀　忠美
ざり〳〵のとこまで寝てるサラリーマン　同
居候の自殺朝寝でほつとかれ　七面山
履歴書に書くにはばかる過去があり　十九平
丹精の履歴書ポイと投げ出され　中山子
落ちつかぬ腰を履歴書見せてくれ　潤年
履歴書を預けたことも忘れられ　十九平
外務員向きの履歴書別に置き　風來子

川雑　**岡大支部句會**（岡山市）
二月十日　於岡大医学部舎監官舎
大森　北星報

罪・鏡・追憶・素晴らしい・和服・受付・内緒事

罪なことしなやと少々妬いてる　鉄兒
罪な人などと頭を逆に撫で　風來子
罪人の手記三面を廣くとり　格一
泣き止まぬ子を鏡台の前にすえ　照子
アルバムをあけて追憶こわくなり　喜子
新聞記者受付罷り通る也　迷句
受付で型の通りにことわられ　北星
受付嬢着物の値まで見定める　忠美
素晴らしいズボン座敷をちと嫌ひ　潤年
洋館へ和服が並ぶ花の会　鉄兒
洋裁師自分の和服だけは縫ひ　十九平
内緒事公衆電話まで出かけ　四案
内緒事うつかり云へぬ地雷持ち　風來子
ほんとうは知つてもほしい内緒事　潤年

日の丸句會（鳥取市）
二月廿七日　於日の丸工場事務所
河村日潤子報

風呂・念佛・風邪・新世帶・タクシー

小男の何処を洗ふかながい風呂　遊星
もらい風呂ねるいあついほう言はず　貴美女
足揚げて肩までつかる風呂に入り　日潤子
念佛を唱へて待てと恐いこと　同
返事しておいて念佛繰返し　同
あなた！とやつと呼ばれた新世帶　吾柳
二階一ト間姉の情の新世帶　日潤子
豆タクは飲んだお釣で走らされ　喬水
タクシーはまだかと仲人落付かず　芳道
奮発をしたタクシーで雨の夜　粗粒

南区医師会　**川柳同好會**（大阪市）
二月二十日　於田中　鳥耕居

居眠り・ネクタイ・停電

居眠りと酒で旅行はすんぢまい　珊枝郎
何事も居眠つてゐて風波なし　迷路
ゐねむつたふりで座席をゆずらぬ氣　無名林
居眠りも要所々々は返事をし　瑞川
居眠つてなかつた顔で拍手する　生々庵
居眠りの母にたんぜん掛けてやる　瑞川
ノータイでさあこれからの酒の味　捨舟
ネクタイのちと若向きを妻と買ひ　生々庵
ネクタイをはずして又も飲み直し　迷路
電休というて弁当無しで出る　無名林
それマツチそれろうそくでぱつとつき　珊枝郎
停電と知らず呼びリン押しつづけ　生々庵

阪神ビル小集（大阪）
三月五日　水谷　鮎美報

春の泥・誕生日

春の泥つけたまんまで屠殺場　春夢草
春の泥和尚の白い足袋ひかる　由布
薪割りの一つが春の泥へ飛び　鮎美
春の泥市場帰りがよくしやべり　同
末の子だけ誕生祝ふ子沢山　哲水
誕生日釘の要る用思ひだし　同
月々に誕生日待つ子が並び　由布

紅ぽたん小集会（大阪市）
一月二十七日

肌

許婚の肌を見まいとするも僕　鮎美
厚化粧女の肌焦り見える肌　貞女
少年の目にもきれいな伯母の肌　正司
男持つ肌に悲しいワルツ踏む　晴峯
肌の熱情男は罪を重ね行く　貞女
むごいまでもぐさの煙る雪の肌　瓜平
新妻の素肌恐い様に見る　哲水
湯浴(ゆあみ)する眞白き肌にある黒子　春柳
どぶろくにうたあり肌の竜おさる　正司
やわ肌の魅惑が消えぬ畫の夢　豆秋

川柳不朽洞會總會
二月十一日　午後一時　於中島生々庵居

先約・寒がり

速達のハガキ先約出來上り　貴山
先約のあつたことから呑みなをし　緑雨
先約はすつぽかす氣の尻をすえ　梨里
先約を破るとつさの儲口　愛論
先約へ先ず札束をほのめかし　瓜平
先約はもみ手しい〳〵断られ　棊
さいそくの電話先約からかゝり　竹荘
先約があつてと自動車で逃げる　豆秋
先約をたてにぼん〳〵云ふて去に　恒明
先約をすまして來いとのんで待ち　路郎
先約はおいとけぼりの戎橋　鮎美
先約と云ふことにした顔なじみ　香林
飲むほどに先約などは忘れはて　生々庵
賣約済の札裸体画に小さし　傳也
先約が多く折詰間に合わず　香林
先約も後約も電信棒の待ちぼうけ　野介
先約は前の値段で義理を立て　文蝶
先約は先約呑める方へ出掛け　沒食子
寒がりの首筋へくるすき間風　香林
寒がりを訪へば矢張り呑んでゐる　棊
寒がりはマフラーで額かくして出　竹荘
外套を着たまゝ事務にかじりつき　豆秋
寒がりの下戸は早よから寝てしまい　沒食子
寒がりへ晩酌妻の心やり　生々庵
寒がりが犬にどんべを着せて連れ　晴峯
建付けの悪い障子が寒がらせ　文蝶
寒がりでおますと埋火がきたてる　野介
寒がりの一人になつて火をいこし　鮎美
寒がりの背筋へ雨だれ一雫　瓜平
寒がりが旧正月を敬遠し　路郎
寒がりと云ふておれない差押　哲水
寒がりが室からみてる雪景色　緑雨

一路集

PTA

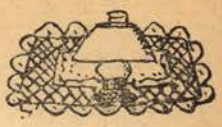
村松　夢裡選

いゝお額丈けが揃つたPTA　如川
PTA先づ先生の腹を聞き　芳泉
先生を卑屈にさしたPTA　夏六
仮校舎PTAに日が永く　斗四翁
子の努力PTAの親の位置　狂風
PTA幅がきいてる父の背　同
PTA鍬を取る手をひざの上　梅香
PTA子の作品を見直して　壮
PTAにくまれ役が一人いる　孤峯
PTA素人らしく着た女將　秀雄
PTA女は愚痴の多きもの　芦穂
PTA子供の爲に氣がそろい　曉明
PTA小さい椅子でがまんする　柏葉
PTA女房の顔も立てゝやり　元馬
PTA運動会へ狩り出され　十九平
PTA文具屋へ値をたゝいて見　十字路
PTA母へお茶をそつと出し　茶々
定刻はとつくに過ぎたPTA　雄々
増築へPTAがもめている　格一
子の癖をPTAで聞いて來る　旅風
PTA子の成績で行きそびれ　美能留
PTA愚師は椅子に脊を丸め　えいを
PTA寄附とは別な親の愛　青雨
PTA家内が役員しています　忠美
PTA兎角理想に走り過ぎ　純香
PTA妻紅をつけ眉を引き　湖月
PTAしんとさせた寄附話　四楽
PTA家の用事が出來ません　てるを
PTA先生上下着て構へ　美秋
PTA貧しい人のいゝ意見　不二
校長の話がくどいPTA　同
家事そこ〳〵PTAへ妻走り　七面山
肩書がやつぱり光るPTA　方大
PTA校長さんはお人好し　青馬
PTA校長さんの美辞麗句　卯之助
PTA校長さんはよく笑ひ　鮎美
錄音のPTAに母の声　同
骨のあるPTAを煙たがり　山雨楼
二三人うるさがたもゐるPTA　十九平
PTA母の衣裳の派手になり　千代男
給食へPTAの割烹着　娯句樂
担任の仇名なるほどPTA　不二
PTA子供の愚痴を並べて來　満年
PTA煙草を喫いに行っただけ　いわを
親の夢子の夢があるPTA　青雨
ざあますのPTAは肩がこり　酔歩
未亡人PTAへ派手な柄　芳仙
PTAそつと我が子の席にかけ　薺花
PTA門の主人が口につき　同
PTA母と替つて來た意見　葉光
PTA金へん糸へん派手に來る　同
PTA小使輕く使われる　浪二
PTAどうあろうとも子沢山　鮎美
校長はPTAへ及び腰　山雨楼
PTA漕越乍らと隅の声　元祿
PTA母の代理がよく喋り　鉄兒
PTA母の代理がよく喋り　酔歩
御同感ですとPTAの隅　芳仙
PTA理想まだ〳〵金がいり　千代男
親馬鹿の一コマもありPTA　夢裡

割勘

木下　幽王選

割勘の追加目と目で合図をし　忠美
割勘とは別に妻へ土産かい　青雨
損をする覚悟割勘立替へる　愛鳩
割勘で額の利くのに委せとき　へとち
割勘でするプレゼントあつけなし　淑郎
割勘の密柑の数が割り切れず　満年
ほんのりと酔うて割勘店を出る　卯門
割勘で一ぱいだけとコップ酒　方眠
割勘で先生を招く決議をし　葉光
末席に居て割勘の氣に入らず　浪二
宿賃は二人出し合う旅に出る　七面山
割勘へ婦人部少し異議があり　曉明
割勘へ女將がはすむ祝ひ酒　斗四翁
二次会を割勘にする連れが出來　青馬
割勘で派手に騒いだひとり者　梅香
割勘え俺はそんなに飲まなんだ　一貫
割勘の隣座敷は糸景氣　薺花
割勘が味を忘れた頃に來る　茶々
割勘の卒業記念まとまらず　てるを
ノビちやつた後のも割勘はいつてる　四季無
再会へ割勘どちらも職がなし　元祿
割勘のメモを子供に拾はれる　十字路
割勘と云ふことにする峠茶屋　娯句樂
割勘のヅカへ一番電車で來　志津
割勘で藝者を一人呼んで來る　鈍香
割勘の酒で栄轉送られる　若柳
割勘の映画に決めた共稼ぎ　直郎
割勘の貸しがあるのに罷めてゆき　旅風
割勘が妻の予算を狂わせる　鉄兒
割勘の先着順にかくぐら　不二
割勘の一泊の旅すぐに朝　山雨楼
割勘で妹と見るロードショウ　蛙声
辻に來て飲み分だけの金集め　同
割勘はチップの事でもめており　貴山
焼酎になって割勘もう忘れ　同
割勘にせればよかつた飲みつぶり　高志
割勘と話決つて遠慮せず　同
割勘の会計をする人のよさ　芦穂
割勘の土産に瓦の癖が出る　同
頓死した割勘そのまゝのお通夜　鮎美
まれき猫その割勘を見てる也　同
割勘の金を任され酔ひそびれ　三平
割勘の二軒目からは借になり　同
娘の割勘小さく財布あけて居る　ハン茶
割勘に軽い愚痴あり下戸の妻　実信
割勘の例外となるふしあはせ　不二
昇給にもれ割勘であばれ出し　山雨楼
女々結局割勘でことが済み　夏六
割勘のせわしい酔が廻りかけ　美秋
割勘にすき焼鍋をせめ立てる　狂風
割勘で下戸も聽いてる三味の音　格一
割勘のお見舞が來る平社員　幽王



不朽洞の 喫煙室

云い出した事を云ふべし
（順不到）

○ 春宵愚考

水谷鮎美

職種を変えるとしての私の好きな名前は——
商人＝大阪屋、松山喜之助
おでん屋＝かざぐるま
僧侶＝恵陽山光晋寺住職大地円心
作家＝美都茂里花夢之介
重役＝若原健蔵
温泉旅館＝うぐひす
戒名＝釈慈雲
女性ならば＝吉川瑠璃子
俳優＝初代市川鮎昇、曉美屋。
紋どころ三桝の中に鮎二つ。

○ かなづかい

田邊由布

朝日新聞の「声」欄に、一中学生から大人へ「新かなづかい」で書いて下さいと希望が出ている。歌人、俳人、作家に「旧かなづかい」の人がありますがどうしてでしょう。それによつて「文学的價値」が違うのでしようかとも言つている。

路郎先生は、曾つての雑誌に「かなづかい」は原句を尊重すると書いてあつたように思う。

ある雑誌は、特に指定のないものは編集部で「新かなづかい」に直すとも言つている。

皆さん！ この喫煙室で御意見を聞かして下さい。

○ パチンコ

須崎豆秋

わが不朽洞にも將棋では山本有三や故菊池寛と同格の三段高鷲亜鈍さん、碁では田舎初段の路郎先生、麻雀では愛論、史葉、竹莊などといふ猛者が居るかと思ふと、先生に六目も置いて一べんも勝つたことのない豆秋なども居るんですが、どうでしよう一べん一席催して見ては？ なか〳〵面白うおまつせ、撲だつてパチンコだつたらちよつとひけはとりませんよ。

○ 鳩とがしんたれ

阿形一杉

勤務所の二階の屋根裏に数年來鳩が巣くうて十羽を超えていたが、この正月すぎに空氣銃をもつた少年あがりが二三人やつてきて連日のようにしつこくつけ狙うので「がしんたれ共鳩取つて牛肉代りにするのか、犬の死骸でも探せ」と窓からどなりつけて退散させたつもりでいた処、一ケ月ほど経つた或る月曜日に出勤すると、隣りの小母さんが「マアえらいこつてす、きのうは鳩撃ちが五六人も組んできて一日追い廻していましたで、もう一羽もいまへんワ……」と朝の挨拶もそこそこに知らせてくれ、それから当分全くその通りの日がつゞいて聊か憂鬱になつていた。それが何と、この頃になつて時折二羽か三羽又大屋根の上で翼を休めているのを見かけるのであるが、果して生残りの元の鳩が避難先から戻つてきたものかどうか。孰れにしても殺生なことをするがしんたれ共ではある

○ 福田妄夢

さようでございますな。むつかしいことは存じませぬが、私はつねづねから器用につぎ〳〵と句をものするのは勿論結構でございますが、只句の職人にはなりたくないと考へておるのでございます。川柳の職人——なんといやな言葉ではございませんか。

○ 西尾栞

川柳と漫画に就て語るに就いて一寸述べさせてもらいます。要するに私の意見としては、良い漫画には文字の説明は要りませんし、良い川柳には漫画は不必要だといふ事を言いたいのです。曾て谷脇素文の漫画に川柳を配したのは、川柳の宣傳にはなりましたが、玄人眼には感心させられません。強いて句に絵を配するなれば座談会中にありました柳画（？が）適当でございませう。然し句と絵とは不即不離なものであつて或時一茶の軸を見ましたが、雁の絵が書いてあつて「今日からは日本の雁ぞ樂に寝よ」といふ句の賛をしてありましたが、之は全く蛇足です。先生の名句「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の柳画に先生のお委と本と銚子を書かれてあつたそうですが、本と銚子で充分で先生のお委はなくもがなではないでせうか？

川柳不朽洞會

指導
麻生路郎

賛助
池沢樂居　長谷川一徹　笠原路生　長野晴渋　藤村作　淺田一　末弘嚴太郎　中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　高安六郎　藤村雅光　田中辰二

洞友
鳥山一歩　沖野岩三郎　亀井晨修　田村孝之介　山本雨迷　安川久留美　山路閑古　前田伍健　柴谷宰二郎　蛭子省二　麻生葭乃　橋本緑雨　高鷲亜鈍　沢田四郎作　中島生々庵　奥村丹路　武部香林　浪玲之介　大西八歩　須崎豆秋　石曾根民郎　中西おさむ　正本水客　黒川紫香　竹内潮花　北川春巣　布施筑川　尾崎方正　櫻川不水　好崎申仙　菊沢小松園　逸見灯竿　清水白柳子　鈴木九坡　夷一笑　小川恒明　德永雅美　八竹正柳　大森風來子　岡島嶺泉　木下幽玉　中島鉄洲　西垣錦風　川村好郎　新川博也　浜田久米雄　尾緑之助　水谷竹莊　水谷琴水　小橋隆如　弘津柳慶　吉田圭井堂　小坂慈雨來　杉谷湖山　増田耕民　國弘半休門　佐野卜占　小沢史葉　小西無鬼　大鶴喜由　吉田斜水　山口秋花　林盆丘　松野えいを

不朽洞會員
—特別會員—
中島生々庵　奥村丹路　武部香林　浪玲之介

—正會員—
市場沒食子　吉田水車

兎角富士山を書けば白帆を配し瀟八丁の絵には釣人をあしらふ、風呂屋、散髪屋のタイルの画の様な月並が誠に悲しいことであります。

○ 種瓜平

再軍備反対よし、全面講和よし、そんな政党一つあつてよし。

不朽洞会から

▼古川麗花麗氏（ホノル、市）のエヤーメールによると「布哇は最近雨ばかり降り続いて実にウルサイ日を送つております。ホノル、殊港では二十四時間に十一吋と云う降雨量を示し市民をユウウツにしております。（中略）今日初の南米行芸能使節一行が大変な成績をのこして帰国の途寄港致しました、一行中の変り種三味線豊吉さんを招待して座談会を開こうかと自称プロモーターが盛に暗ヤクして居り、小生も今晩は一座足止めを食つておりその間を利用してこの手紙を認めます」云々▼戸倉普天氏（兵庫縣）は病気の理由で、一年半の前任者殉任期間満了と共に村長を辞されたが▼前田伍健氏（愛媛縣）から「三月末日から高知市へ来ています。四月一日の四国川柳人大会参加のためです。折柄の雨中に不拘盛況でした。RKの安部局長さんにも会い、同氏も参加されました。同氏が持つて居た川柳雑誌」四月号になつかしく思いました。二日は当地観光祭で桂浜方面へ三日夜はRK局より第廿二回放送川柳角力をやります」と▼小沢史葉氏（兵庫縣）は長男正三さんを儲けられた▼竹内潮花氏（大阪市）は三月廿五日に大手前会館で開催された若柳流舞踊ひさご会に出演された。出し物は常磐津「三ツ面子守」▼福田山雨楼氏（横浜市）は三月末で図書館を辞された▼橋本緑雨氏（大阪市）は三月十一日に石川縣に帰郷され令兄の三男良也君（金沢医大在学）と養子縁組して帰阪された▼国弘牛休門氏は下関市彦島長崎町宿舎に棲居された▼水谷竹韭氏（大阪市）は三月廿五日東上、東京では福田山雨楼氏を訪問されたとのこと、なお同氏は五月初旬に病院で備す慰安劇にクライスト作の「こわれ甕」全十場を出し司法廟問官のワルターとして出演する由▼山根白星氏はビジネスの関係上四月一ぱい青森縣大三沢町古間木、関口旅館に滞在されると▼市場沒食子氏（大阪市）は神経痛のため四月六日から十日間程の予定で白浜の國立温泉病院へ入院された▼須崎豆秋氏の勤務先の津村製作所が町名改称で大阪市阿倍野区天王寺町南三丁目一三となつた▼佐野卜占氏（八代市）の長女利江さんが三月廿二日に華燭の典を挙げられた。お祝い申上げる。▼上田翠光氏（奈良縣）の令閨が四月一日に次男徹（をさむ）さんを儲けられたおよろこび申上げる▼左の諸氏は一身上の都合で三月末限り退会されることとなつた。岡村路三氏（山口縣）糸志酔月氏（布施市）小川静観堂氏は四月末限退会された。何れも倦士重来される日の近いことをのぞんでいる。▼本会規則の改正と共に会員種別の移動もあつた。

新会員紹介（四月）

安岡珊枝郎氏（大阪市）正
長谷川迷路氏（同）正
南　捨舟氏（同）正
黒木　弾正氏（同）正
牟田　一哲氏（同）正
河村　瑞川氏（同）正
木村　無名林氏（同）正
田中　鳥耕氏（同）正
藤原　虚水氏（同）正
以上生々庵氏推薦
益永　貞女氏（大阪市）正
豆秋氏推薦

耳鼻咽喉科
牟田病院
院長　牟田哲三郎（一哲）
大阪市南区長堀橋交叉点西・電話船場五〇〇番

岡田紫雲　黒田笑泉　荒木哲水
野本呑水　上林粗影　山中志乃布
土井文蝶　狩野燕子　桑原表情
小林文月　石岡正司　上坂茂
山分淑郎　西森花村　成瀬月仙
月原宵明　河村日潤子　若林草右
大西野介　田代尋四　足立春雄
亀山晴峯　家沢莽花　中村五酔
科埜種美　黄瀬美秋　有働芳仙
山根白星　藤本潤年　大西迷窓
種瓜平　西口如川　延永忠美
渡辺孫揣　姫田夕鐘　米田孤舟
小田垣蝸牛　福島鉄兒　地俱山風楼
福島正則　直原湖月　淡畑胡蝶
藤田わたる　黒田久米女　阿形一杉
富岡淡舟　藤本茶々　坂田良坊
石原伯峯　塩淡一路　石川侃流
山野星登　谷内一阜　大森苑女
飯降白香　福本鬯骨　安岡珊枝郎
中内翠芳　大田木声　長谷川迷路
西辻竹青　松崎五馬　南　捨舟
長野井蛙　清沢柳清　黒木　弾正
林野甦光　布村南扇子　牟田一哲
竹田芦穂　榎南夏六　河村瑞川
阿万万滴　伊藤迷宮　木村無名林
間島青丹子　小畠無聖　田中鳥耕
上田春柳　田中遊星　藤原虚水
友淵貴山　酉　いわを　益永貞女
森下愛論
大西柳堂　高山朗笑
太田良子　杉山一貫
静岡忠八　家本富至
岸南柳　横部牛歩
松井可笑　服部十九平
松江梅里　大森娯句楽
丸山弓削平　長谷川三司
直原七面山　田辺由布

編輯室にて

▼花は散ったが、選挙の雑音はやむべくもない。いゝ意味での選挙であれば多少の雑音ぐらい辛抱するのにやぶさかではないがロクでもない政治屋さんの悲鳴を聞かされるのでは全くやりきれない。▼某氏が市議候補の家を訪れたら、今炊く米がないと云って夫婦げんかをしていたそうだが、自分が食いかねていて、市民の世話でもなかろう、イヤ市民を食う積りだと云うのであれば何をか云わんやである。▼新聞紙の報ずるところでは日本人は収入の六五パーセントが食費だから、みんなが貧乏人だそうだ。しかし同じ貧乏人の中にも、文化の恵みに浴している貧乏人と、浴していない貧乏人がいる筈だ。よい政治家の出現を待望しているものは私だけではあるまい。▼本号の表紙は嗣富雷童画伯を煩わした。本誌菊倍版時代の美術印刷の表紙「ビルディング」が矢張り雷童画伯の揮毫になるので古い読者は記憶されていることと思う。▼表紙は雑誌の顔であるから、出来るだけ美しいことがのぞましいが、顔だけが幾ら美しくても心がそれに伴はなければ何んにもならないように、雑誌の内容の優秀さが外へにじみ出たのが、表紙の美しさでなければならないと思う。▼句評「川柳街」は六名の女性川柳家によって構成された。句評も女性には女性の世界があることが知れよう。女性を常に紅一点扱いにすることはもう古いと思う。少し力を入れ過ぎたせいか長くなったので二回に分割発表することにした。世話役は豆秋氏にやってもらった。始めての試みだけに、拍手を送ってもらいたい。▼原稿フクソウで、編輯担当のPOEから私の「評釈百句」の続稿は次号に割愛して欲しいと云う注文が出た。まだ執筆していなかったので直ちに承諾する。私がネバッていて雑誌の刊行が遅れてはソレコソ大変だ。「不朽洞句抄」までソバ杖を食って発表出来なかったことも、そうした理由による。もう一日待って下さいと云う言葉は川雑の編輯局では通用しないことになっている。スローモーションの霞乃などは編輯局にいて乗遅れ通しである。「川柳原理」の山雨楼氏などは編輯の予定ページより原稿が沙なかったり、多かったり全くの奇襲策戦で編輯子は大マゴツキ、這入らん〳〵と悲鳴をあげさせトップである。しかし無理に引きのばしたりしないところに山雨楼氏の原稿のよさがある。▼久留美氏のいゝ原稿は大てい短かいので埋め草のような扱いになって氣の毒であるがこれも無理に引きのばして貰う必要はない。▼リレー随筆は好評噴々で、企劃もいささか鼻を高くしていたが、四尺目で迷宮入り、今更ヤリ直しも業腹なので、コノ名案も頓死さすことにした。▼ソノ埋め合せと云ってはおかしいが「私たちのグループ」を登場させることにしたボツ〳〵続載して行くことにする。これは一柳社でなく、一句会をスタンダードにすることにした。写眞や漫画を入れるのは随意だが原稿の取捨や整理は編輯局に一任のこと。近畿地方なら漫画家の出張も御相談に應じる。（路）

川柳雑誌

バックナンバー御入用の方は往復ハガキに御希望の号数記入の上問合されたい割引値段お知らせします。（五月中）

日用品一切を網羅したアメリカ風の

DRUG STORE

ドラッグ・ストア…1階

●身廻雑貨・日用品・薬品・書籍・菓子・テイスタンド

☆年中無休☆前9時半—後8時半

大阪・アベノ 近鉄

電話㊥6401

最短時間で結ぶ

大阪—名古屋

3時間特急

毎日3往復

区間運賃制一

特急料金 ¥60

上本町発 7.40 12.40 16.40

名古屋発 8.00 13.00 17.00

近畿日本鉄道

風趣豊かな

お好み食堂

おなじみの「食道樂街」七階

◇てんぷら◇とんかつ

◇中華料理◇お汁粉

◇ビール◇フルーツジュース

（外食券食堂）

百貨店 来題「甘樂」開設

松坂屋

大阪日本橋

Made in Occupied Japan

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第六巻 第五号

一冊 金三〇円（送料三円）

半ケ年概算 金一九八円

一ケ年概算 金三九六円

昭和廿六年四月廿五日印刷

昭和廿六年五月一日発行

（編輯兼発行印刷人）麻生幸二郎

大阪市住吉区苅田五丁目二五番地

（発行所）川柳雑誌社

電話日本橋 大阪 七五〇五〇

募集

課題吟募集

煙突（十句）高田抱逸選

正直（十句）武部香林選（五月廿五日締切）

網棚（十句）浜田久米雄選

水藻（十句）北川春巣選（六月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽雑詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雑詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。